

北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報

平成30年度

令和元年6月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

目 次

I 概況

1	沿革	-----	1
2	位置	-----	1
3	土壌	-----	1
4	土地面積および利用区分	-----	1
5	機構	-----	2
6	職員	-----	2
7	建物	-----	4
8	新たに設置した主要施設および備品	-----	4
9	決算	-----	5

II 作況

1	気象経過	-----	6
2	当場の作況	-----	9

III 試験研究および地域支援活動の概要

1	研究部の概要	-----	22
	1) 麦類に関する試験	-----	22
	2) 馬鈴しょに関する試験	-----	22
	3) 牧草・飼料作物に関する試験	-----	22
	4) 栽培環境に関する試験	-----	23
	5) 病害虫に関する試験	-----	23
	6) 畑作物および野菜に関する試験	-----	24
	7) 地域支援活動	-----	24
2	技術普及室の活動	-----	24

IV 研究発表および普及事項

1	研究発表		
	1) 研究論文	-----	27
	2) 口頭発表	-----	27
	3) 専門雑誌記事	-----	28
	4) 著編書・資料	-----	29
	5) 新聞記事	-----	29
2	普及事項		
	1) 普及奨励事項	-----	30
	2) 普及推進事項	-----	30
	3) 指導参考事項	-----	30
	4) 研究参考事項	-----	30
3	品種登録・特許申請	-----	30

V 研究企画・場運営・広報活動

1	諸会議	-----	31
2	各種委員会	-----	31
3	刊行印刷物	-----	35
4	広報活動	-----	36
5	見学受入れ	-----	37

VI 技術指導および研修

1	研修生の受入れ	-----	38
2	講師派遣	-----	38
3	職員研修	-----	39
4	職場研修	-----	40
5	国際交流	-----	40

VII その他

1	技術体系化チーム	-----	41
2	オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）	-----	41
3	表彰・受賞	-----	41
4	行事	-----	42
5	自己点検への対応	-----	43
6	建物配置図	-----	44
7	圃場配置図	-----	45

I 概 況

1 沿 革

当場は、明治40年に北海道庁立地方農事試験場北見分場（地方費）として、常呂郡野付牛村（現北見市）に設置された。翌明治41年には、北海道庁立上川農事試験場北見分場となり、さらに明治43年には、第1期北海道拓殖計画の実施に伴って国費に移管され、北海道農事試験場北見支場と改称された。その後、昭和17年には、北海道農業試験場北見支場となり、同19年には組織改正により、北海道農業試験場稚内分場が同北見支場稚内分場と改称され、当場の所管となった。また、昭和22年には、農林省札幌農事改良実験所北見試験地が場内に置かれ、はっか育種を担当した。

昭和25年に、農業試験研究機関の統廃合が行われ、北海道立農業試験場北見支場が設置された。同時に、当場の所管であった稚内分場は廃止され、また、札幌農事改良実験所北見試験地のはっか育種業務も遠軽町に新設された北海道農業試験場所管の試験地に移された。同年から専門技術員が駐在するようになった。また、昭和29年には大麦育種指定試験地の設置が決まり、女満別町（道立農試原々種農場女満別分場跡地）に試験地を置いて大麦育種を実施した。昭和31～34年には、道立農業試験場整備拡充計画の一環として市街化した北見市から現在地へ移転拡充し、昭和33年には大麦育種指定試験地も現在地へ移した。しかし、大麦栽培面積の減少により、昭和36年には小麦育種指定試験に切り替えられた。

昭和39年には、チモシー、スムーズブロムグラス育種のため牧草育種指定試験地が設置された。

昭和39年11月に、道立農業試験場の機構改革により、当支場は北海道立北見農業試験場と改称、1課7科となった。昭和43年には、技術普及部門強化のため専門技術員室が設置され、その後2～3の科名変更や係の統廃合などがあり、平成4年には、管理科および研究各科を主管する研究部長を設置するほか、畑作園芸科を再編し園芸科に、病虫予察科を病虫科にそれぞれ変更した。平成8年3月には、機構改革により水稻試験地を閉所、水稻に関する試験は上川農試に引き継いだ。

平成10年4月に馬鈴しょの耐病性育種を強化するため、馬鈴しょ科（馬鈴しょ育種指定試験地）が根釧農試より移転した。平成12年4月には、「道立農業試験場新研究基本計画」に基づく地域対応強化のため、研究部を作物・生産の2部制とし、専技と技術体系化チームからなる技術普及部を新設した。また、園芸科と作物科を統合し畑作園芸科に、土壌肥料科を栽培環境科に変更した。平成18年4月には、小麦科を麦類科に改称した。また、専門技術員を廃止し、主任普及指導員、主査（地域支援）を設置、総務課会計係を廃止し、主査（会計）を設置した。平成19年に創立100周年を迎え、記念事業を行った。平成22年からは、22の道立試験研究機関を統合して創設した地方独立行政法人北海道立総合研究機構に移行、グループ制を導入した。

2 位 置

当場の住所は、常呂郡訓子府町字弥生52番地で、北見バス訓子府駅停留所から北西へ約4kmの所にある（北緯43° 45'、東経143° 43'、海拔196m）。また旧水稻試験地は、同町若葉町99番地にあり、訓子府駅停留所から西へ約1km（海拔136m）の所にある。

3 土 壌

庁舎周辺の土壌は、黒ボク土あるいは多湿黒ボク土に分類される。台地上の軽石流堆積物やその二次堆積物の上に火山灰が堆積したもので、表層に腐植を多く含み、下層は堅く、排水はやや不良である。旧水稻試験地の土壌は、褐色低地土に分類される。常呂川の河川堆積物からなり、下層土は礫の多い砂土で、排水は比較的良好である。

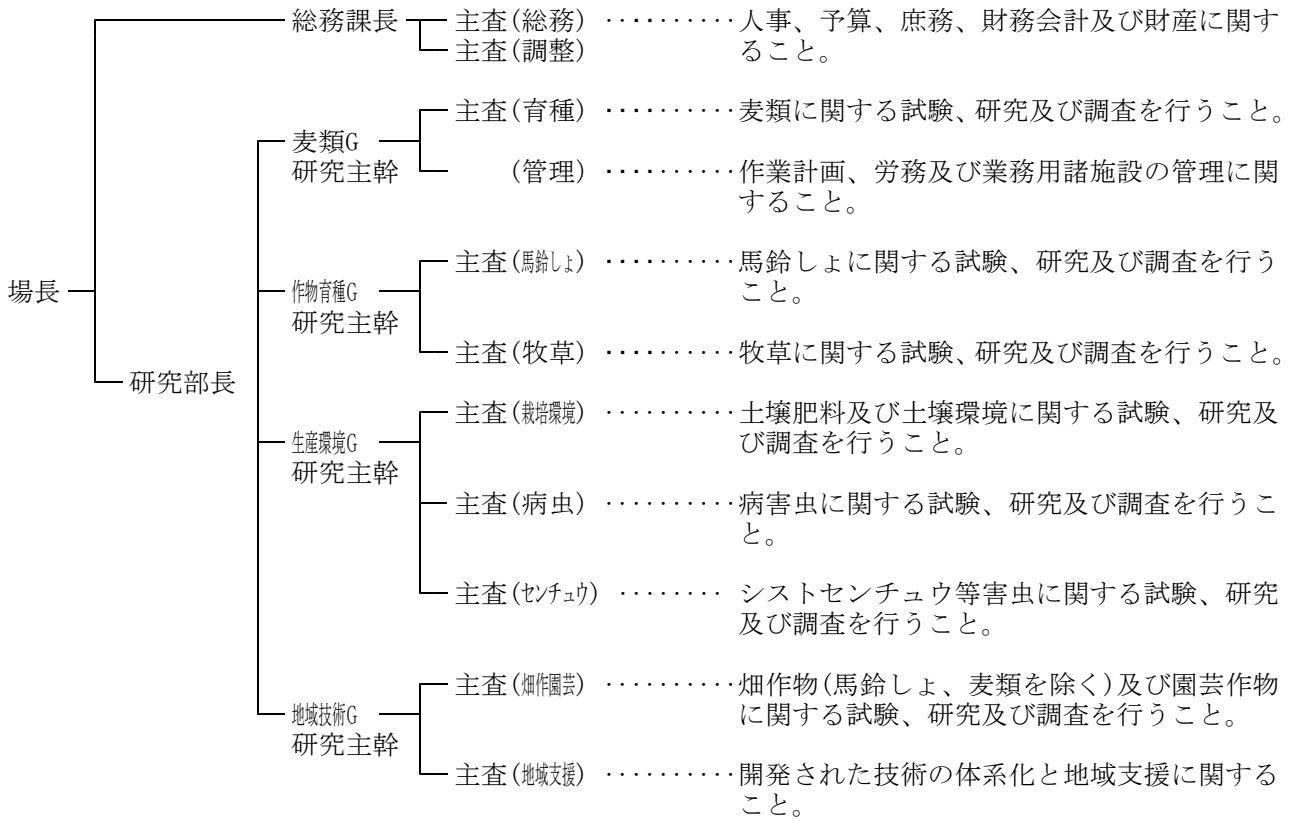
4 土地面積および利用区分

総面積1,557,688㎡

区 分	面 積 (㎡)
庁舎、建物敷地	118,564
公宅用地	44,151 (道財産)
道路、用排水路	42,383
山林	300,400
試験ほ場(畑)	709,705
” (隔離ほ場)	73,260
原野、その他	269,225

注) 上記のうち54,985㎡は旧水稻試験地

5 機 構



(道農政部技術普及室)
 上席普及指導員 — 主任普及指導員 — 主査(地域支援) …… 普及指導員の指導及び専門技術の調査研究に関すること。

6 職 員

(1) 職員の配置

平成31年3月31日現在

グループ別 区 分	場 長	部 長	研 究 主 幹	麦 類 G		作 物 育 種 G		生 産 環 境 G		地 域 技 術 G		総務課	合 計	技 術 普 及 室
				育 種	管 理	馬 鈴 しょ	牧 草	栽 培 環 境	病 虫	畑 作 園 芸	地 域 支 援			
研究職	1	1	4	6		4	3	3	5	3	1		31	
行政職					4							5	9	3
計	1	1	4	6	4	4	3	3	5	3	1	5	40	3

(2) 平成31年3月31日現在員

職名	身分	氏名	職名	身分	氏名
場長	法人職員	清水基滋	(作物育種G) 主任主査(牧草)	法人職員	佐藤公一
総務課長	北海道職員	山本雅彦	研究主任	〃	飯田憲和
主査(総務)	〃	立山裕之	研究主任	〃	足利和紀
主査(調整)	〃	松島英明			
専門主任	〃	杉本義則	(生産環境G)		
技師	〃	木村祐介	研究主幹	法人職員	中辻敏朗
			主任主査(栽培環境)	〃	奥村稔理
<研究部>			研究主査	〃	木場稔信
研究部長	法人職員	江部成彦	研究主任	〃	唐岡眞二
(麦類G)			主任主査(病虫)	〃	安岡眞二
研究主幹	法人職員	神野裕信	主査(センチュウ)	〃	小野寺鶴子
主査(育種)	〃	大西志全	研究主査	〃	池谷美奈子
研究主任	〃	粕谷雅志	〃	〃	池田幸子
〃	〃	足利奈奈	研究職員	〃	佐々木太陽
〃	〃	其田達也			
研究職員	〃	森田耕一	(地域技術G)		
〃	〃	林和希	研究主幹	法人職員	田中静幸
専門主任	〃	伊藤幸雄	主査(地域支援)	〃	小倉原誠
技師	〃	井口岳人	主査(畑作園芸)	〃	杉山聡裕
〃	〃	中出秀優	研究主査	〃	
〃	〃	樫村優哉	研究主任	〃	
(作物育種G)					
研究主幹	法人職員	荒木和哉	(道技術普及室)		
主査(馬鈴しょ)	〃	大波正浩	上席普及指導員	北海道職員	木俣栄一
研究主査	〃	松永浩聡	主任普及指導員	〃	山岸修一
〃	〃	青山聡史	主査(地域支援)	〃	佐々木康洋
研究主任	〃	品田博史			

(3) 転入者および採用者

職名	氏名	発令年月日	備考
研究部長	江部成彦	30. 4. 1	中央農業試験場から
総務課長	山本雅彦	30. 4. 1	道農政部農産振興課から
主査(調整)	松島英明	30. 4. 1	釧路総合振興局から
技師	木村祐介	30. 4. 1	十勝総合振興局から
研究職員	林和希	30. 4. 1	中央農業試験場から
研究主幹	荒木和哉	30. 4. 1	中央農業試験場から
主任主査(牧草)	佐藤公一	30. 4. 1	畜産試験場から
主任主査(栽培環境)	奥村理	30. 4. 1	道南農業試験場から
主任主査(病虫)	安岡眞二	30. 4. 1	十勝農業試験場から
研究職員	佐々木太陽	30. 4. 1	新規採用
主査(地域支援)	小倉玲奈	30. 4. 1	中央農業試験場から

(4) 転出者および退職者

職名	氏名	発令年月日	備考
研究部長	島田尚典	30. 4. 1	中央農業試験場へ
主査(調整)	佐々木賢	30. 4. 1	十勝総合振興局へ
専門主任	稲村浩至	30. 4. 1	上川総合振興局へ
研究主幹	浅山聡	30. 4. 1	上川農業試験場へ
研究主幹	富田譲一	30. 4. 1	十勝農業試験場へ
主任主査(牧草)	藤井弘毅	30. 4. 1	畜産試験場へ
主査(栽培環境)	小野寺政行	30. 4. 1	道南農業試験場へ
主査(地域支援)	奥山昌隆	30. 4. 1	十勝農業試験場へ
研究主幹	田中静幸	31. 3. 31	退職
(道技術普及室)			
上席普及指導員	木俣栄	31. 3. 31	退職

7 建 物

資産名称	建築年月	構造名	延面積(m ²)	備 考
庁舎	S33. 9	ブロック造	1,495.37	
てん菜分析室	S34.10	木造	99.09	
根菜貯蔵庫	S35.12	鉄筋コンクリート造	30.60	
車両庫	S45. 7	鉄骨造	140.66	
第2号ガス貯蔵庫	S46. 6	ブロック造	3.53	
豆類D型ハウス	S53. 3	鉄骨造	233.28	
園芸資材庫	S54. 4	鉄骨造	64.80	
緑体春化施設	S56.10	鉄骨造	232.00	
玉ねぎ貯蔵庫	S57. 9	ブロック造	127.00	
昆虫飼育ガラス・温室	S57.10	鉄骨造	25.92	
管理科事務所	S58.11	木造	172.53	現契約職員詰所
参観人便所	S59. 9	コンクリートブロック造	14.24	
ガラス・網室	S59.12	鉄骨造	116.91	
小農具庫及び農薬庫	S61. 1	ブロック造	136.08	
種子貯蔵庫	S61. 9	ブロック造	59.40	
園芸調査室兼温室	S63.10	コンクリートブロック造	498.96	
農機具格納庫	H 1.10	コンクリートブロック造	728.50	
牧草調査室	H 1.11	木造	243.00	
小麦生育温室	H 2.10	コンクリートブロック造	197.84	
小麦調査室及び病虫調査室	H 2.12	木造	245.52	
土壌肥料調査室	H 3.12	木造	204.00	
普通車庫	H 4. 9	鉄骨造	231.00	
トラクター車庫	H 5. 2	鉄骨造	262.50	
作物調査室	H 5. 9	木造	200.00	
共同作業室	H 5.12	鉄骨造	708.75	
病虫温室	H 7.12	鉄骨造	314.64	
牧草温室	H 8.12	鉄骨造	315.00	
農具庫(馬鈴しょ)	H10. 3	鉄骨造	199.68	
馬鈴しょ育種施設	H10. 3	鉄骨造	676.20	(実験室、温室、網室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄骨造	346.50	(調査室、浴光催芽室)
馬鈴しょ育種施設	H10.10	鉄筋コンクリート造	204.00	(貯蔵庫)
赤カビ検定用採種ハウス1	H11.11	鉄骨造	98.00	
赤カビ検定用採種ハウス2	H11.11	鉄骨造	98.00	
作物温室	H11.12	鉄骨造	305.75	
てん菜育苗施設	H13.11	鉄骨造	216.00	
農業資材庫	H15. 1	鉄骨造	272.16	
貨物車両庫	H16.12	鉄骨造	273.60	
資料保管庫	H27. 3	木造	141.60	
合 計			9,932.61	

8 新たに設置した主要施設および備品

(1) 施 設

該当なし

(2) 備 品

名 称	形 式	金 額 (円)	配 置
FF式暖房機	コロナ HG4216S	243,000	総務課
スーパーカブ	ホンダ	243,000	麦類 G
にんじん洗浄機	指浪製作所 CW75-6	340,308	地域技術 G
バインダーBE214	ヤンマー BE214	453,600	麦類 G
ファイルメーカー17	ファイルメーカー	952,560	作物育種 G
ロールペーラー	タカキタ RB1080TB	2,300,000	麦類 G
トラクター	ヤンマー YT498	8,002,800	麦類 G
ブームスプレーヤ	共立 BSM1506S	3,796,200	麦類 G

9 決 算 (支出額)

(単位：円)

科 目	予 算 額	支 出 済 額	残 額	備 考
戦 略 研 究 費	400,000	400,000	0	
重 点 研 究 費	0	0	0	
職 員 研 究 奨 励 費	0	0	0	
経 常 研 究 費	14,937,000	14,917,419	19,581	
研 究 開 発 推 進 費	0	0	0	
技 術 普 及 指 導 費	272,370	272,370	0	
研 究 用 備 品 整 備 費	12,096,000	11,772,000	324,000	
維 持 管 理 経 費 (研 究)	725,000	725,000	0	
研 究 用 備 品 整 備 費 (積 立 金)	2,400,000	2,300,000	100,000	
維 持 管 理 経 費 (一 般)	27,144,000	26,783,996	360,004	
研 究 関 連 維 持 管 理 経 費	1,424,000	1,424,000	0	
知 的 財 産 経 費	300,000	299,589	411	
運 営 経 費	34,975,378	34,920,344	55,034	
共 同 研 究 費	7,100,000	7,100,000	0	
国 庫 受 託 研 究 費	10,812,000	10,812,000	0	
道 受 託 研 究 費	3,866,000	3,115,020	750,980	
そ の 他 受 託 研 究 費	79,465,000	79,449,145	15,855	
施 設 整 備 費 (繰 越 積 立 金)	27,275,000	27,255,932	19,068	
合 計	223,191,748	221,546,815	1,644,933	

※ 人件費（研究職員費・派遣職員費・準職員費・契約職員費）を除く。

Ⅱ 作 況

1. 気象経過

(1) 融雪期以降の経過

4月：平均気温は上旬が平年並で、中旬・下旬はともに高かった。月平均気温は5.9℃で平年よりやや高かった(+1.3℃)。降水量は上旬が平年より少なく、中旬は多く、下旬は少なく、月合計は21.5mmで平年より少なかった。日照時間は上旬が平年よりやや少なく、中旬はやや多く、下旬は多く、月合計は210.8時間で平年並であった。

5月：平均気温は上旬が平年より極めて低く、中旬・下旬はともに高かった。月平均気温は10.8℃で平年並であった(+0.2℃)。降水量は上旬が平年より極めて多く、中旬は少なく、下旬はやや少なく、月合計は71.5mmで平年よりやや多かった。日照時間は上旬が平年より少なく、中旬は平年並で、下旬はやや多く、月合計は153.3時間で平年並であった。

6月：平均気温は上旬が平年よりやや高く、中旬は極めて低く、下旬は平年並であった。月平均気温は14.2℃で平年よりやや低かった(-0.8℃)。降水量は上旬が平年並で、中旬・下旬はともに平年より多く、月合計は110.0mmで平年よりやや多かった。日照時間は上旬・中旬がともに平年並で、下旬はやや少なく、月合計は151.8時間で平年並であった。

7月：平均気温は上旬が平年より極めて低く、中旬が平年並で、下旬は高かった。月平均気温は18.8℃で平年並であった(-0.5℃)。降水量は上旬が平年より極めて多く、中旬は平年並で、下旬は少なく、月合計は185.5mmで平年より多かった。日照時間は上旬が平年より少なく、中旬は平年並で、下旬は多く、月合計は149.5時間で平年並であった。

8月：平均気温は上旬が平年よりやや低く、中旬は極めて低く、下旬はやや低かった。月平均気温は18.1℃で平年より低かった(-1.7℃)。降水量は上旬が平年並で、中旬・下旬はともに多く、月合計は236.0mmで平年より多かった。日照時間は上旬が平年よりやや多く、中旬はやや少なく、下旬は少なく、月合計は115.8時間で平年並であった。

9月：平均気温は上旬が平年並で、中旬はやや低く、下旬はやや高かった。月平均気温は15.8℃で平年並であった(±0.0℃)。降水量は上旬が平年より少なく、中旬はゼロで、下旬は少なく、月合計は28.0mmで平年より少なかった。日照時間は上

旬が平年並で、中旬は多く、下旬はやや少なく、月合計は171.7時間で平年並であった。

10月：平均気温は上旬が平年よりやや高く、中旬は平年並で、下旬は高かった。月平均気温は9.4℃で平年よりやや高かった(+1.1℃)。降水量は上旬が平年より極めて多く、中旬はやや少なく、下旬は極めて多く、月合計は133.3mmで平年より多かった。日照時間は上旬が平年よりやや少なく、中旬・下旬はともに平年並で、月合計は151.9時間で平年並であった。

11月：平均気温は上旬が平年より極めて高く、中旬はやや高く、中旬までの平均気温は4.7℃で平年より高かった(+1.9℃)。降水量は上旬・中旬がともに平年より少なく、中旬までの合計は10.5mmで平年より少なかった。日照時間は上旬が平年よりやや多く、中旬はやや少なく、中旬までの合計は82.7時間で平年並であった。

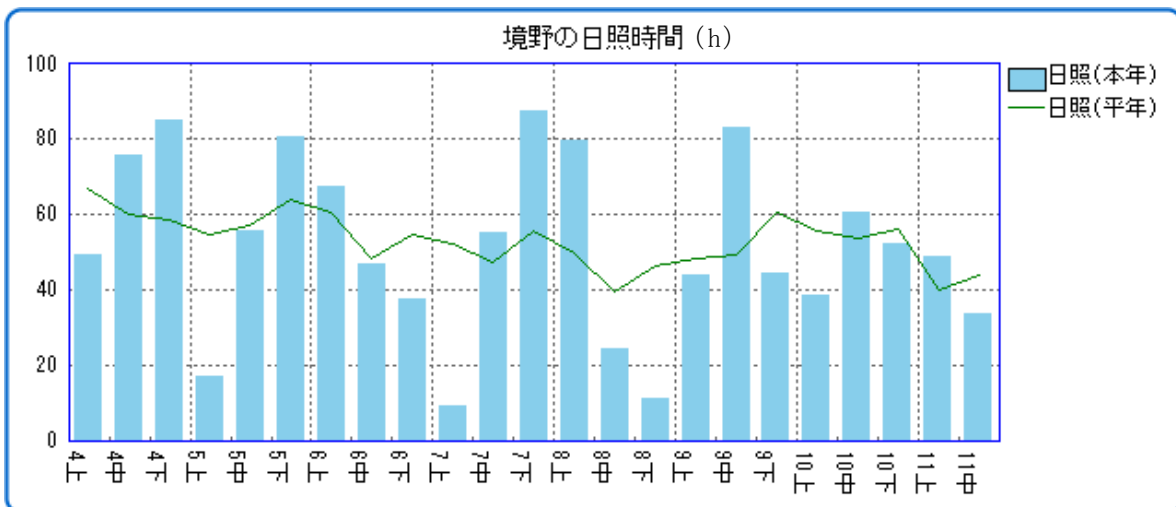
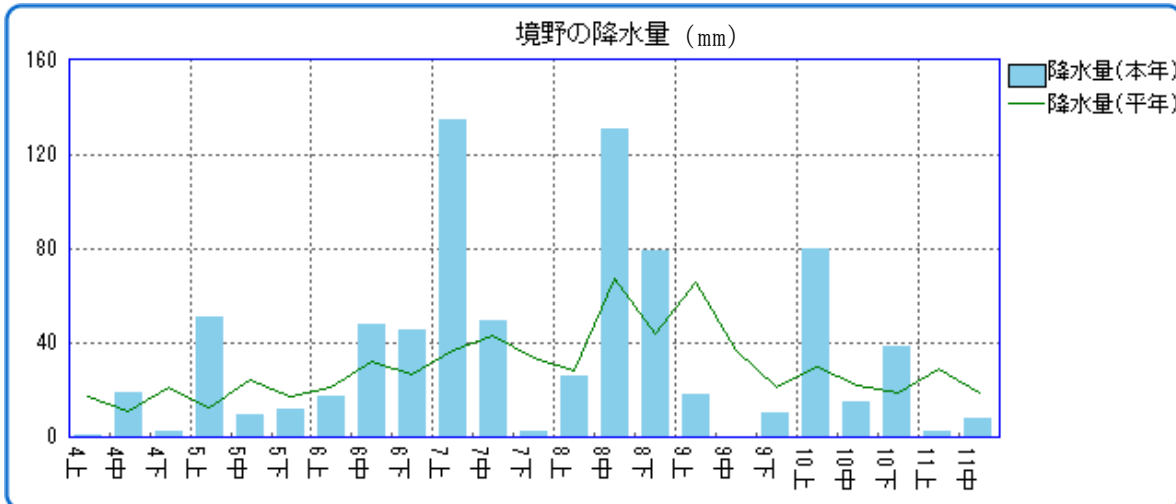
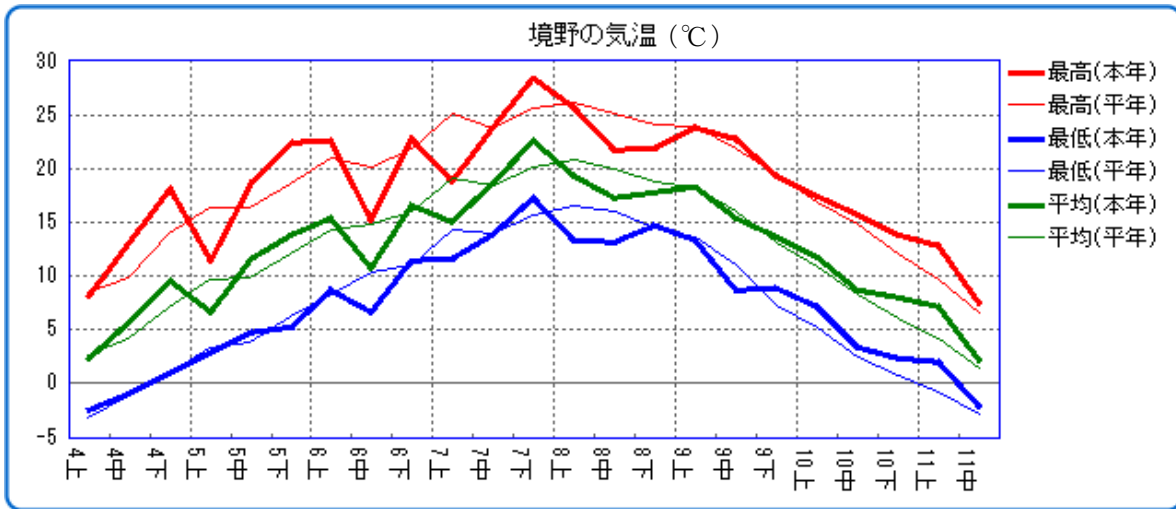
農耕期間中(5月～9月)の気温、降水量及び日照時間の推移を平年と比較すると以下のとおりである。

気温：5月は平年並、6月はやや低く、7月は平年並、8月は低く、9月は平年並であった。この期間の日平均気温の積算値は2378℃であった(平年差-88℃、平年比96%)。

降水量：5月・6月はやや多く、7月・8月は多く、9月は少なかった。この期間の降水量の積算は631mmであった(平年差+126mm、平年比125%)。

日照時間：5月～9月までいずれも平年並であった。この期間の日照時間の積算は742時間であった(平年差-48時間、平年比94%)。

2) 気温、降水量及び日照時間の平年との比較



3) 気象表

年月	旬	平均気温(°C)			最高気温(°C)			最低気温(°C)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
平成30年 4月	上旬	2.4	2.6	-0.2	8.1	8.4	-0.3	-2.4	-3.2	0.8	0.5	16.9	-16.4	49.6	66.7	-17.1
	中旬	5.8	4.1	1.7	13.1	9.9	3.2	-0.9	-1.1	0.2	18.5	10.6	7.9	76.0	60.1	15.9
	下旬	9.5	7.1	2.4	18.2	13.9	4.3	1.0	1.0	0.0	2.5	20.8	-18.3	85.2	58.5	26.7
5月	上旬	6.7	9.7	-3.0	11.4	16.4	-5.0	2.8	3.4	-0.6	50.5	12.0	38.5	16.8	54.9	-38.1
	中旬	11.6	9.9	1.7	18.7	16.3	2.4	4.8	3.9	0.9	9.5	24.0	-14.5	55.7	57.3	-1.6
	下旬	13.8	12.1	1.7	22.4	18.6	3.8	5.2	6.3	-1.1	11.5	16.5	-5.0	80.8	63.8	17.0
6月	上旬	15.3	14.3	1.0	22.5	21.0	1.5	8.6	8.3	0.3	17.0	20.7	-3.7	67.4	60.6	6.8
	中旬	10.7	14.8	-4.1	15.2	20.1	-4.9	6.6	10.3	-3.7	47.5	32.1	15.4	46.8	48.5	-1.7
	下旬	16.5	16.0	0.5	22.7	21.8	0.9	11.5	11.0	0.5	45.5	26.2	19.3	37.6	54.9	-17.3
7月	上旬	15.0	19.1	-4.1	18.8	25.1	-6.3	11.6	14.3	-2.7	134.5	36.6	97.9	9.2	52.3	-43.1
	中旬	18.6	18.4	0.2	23.8	23.8	0.0	13.8	13.9	-0.1	49.0	42.5	6.5	55.4	47.3	8.1
	下旬	22.5	20.2	2.3	28.4	25.7	2.7	17.3	15.6	1.7	2.0	33.5	-31.5	87.8	55.7	32.1
8月	上旬	19.4	20.8	-1.4	25.6	26.2	-0.6	13.3	16.6	-3.3	26.0	27.7	-1.7	80.0	49.9	30.1
	中旬	17.2	20.0	-2.8	21.8	25.1	-3.3	13.2	16.0	-2.8	131.0	66.9	64.1	24.6	39.7	-15.1
	下旬	17.8	18.8	-1.0	21.9	24.1	-2.2	14.7	14.5	0.2	79.0	43.8	35.2	11.2	46.2	-35.0
9月	上旬	18.3	18.3	0.0	23.7	23.9	-0.2	13.3	13.6	-0.3	18.0	65.6	-47.6	44.1	48.5	-4.4
	中旬	15.3	16.0	-0.7	22.8	21.8	1.0	8.7	11.1	-2.4	0.0	36.8	-36.8	83.1	49.4	33.7
	下旬	13.7	13.1	0.6	19.4	19.4	0.0	8.9	7.3	1.6	10.0	20.4	-10.4	44.5	60.6	-16.1
10月	上旬	11.7	10.8	0.9	17.5	16.8	0.7	7.1	5.2	1.9	80.0	29.7	50.3	38.7	55.8	-17.1
	中旬	8.7	8.3	0.4	15.8	14.8	1.0	3.3	2.5	0.8	15.0	21.6	-6.6	60.9	53.6	7.3
	下旬	8.0	6.0	2.0	13.8	12.1	1.7	2.3	0.8	1.5	38.0	18.6	19.4	52.3	56.2	-3.9
11月	上旬	7.1	4.2	2.9	12.8	9.6	3.2	2.0	-0.8	2.8	2.5	28.4	-25.9	48.8	40.0	8.8
	中旬	2.2	1.4	0.8	7.4	6.5	0.9	-2.1	-2.9	0.8	8.0	18.5	-10.5	33.9	44.0	-10.1
		本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較	本年	10年平均	比較
4月		5.9	4.6	1.3	13.1	10.7	2.4	-0.8	-1.1	0.3	21.5	48.3	-26.8	210.8	185.3	25.5
5月		10.8	10.6	0.2	17.7	17.1	0.6	4.3	4.6	-0.3	71.5	52.5	19.0	153.3	176.0	-22.7
6月		14.2	15.0	-0.8	20.1	21.0	-0.9	8.9	9.9	-1.0	110.0	79.0	31.0	151.8	164.0	-12.2
7月		18.8	19.3	-0.5	23.8	24.9	-1.1	14.3	14.6	-0.3	185.5	112.6	72.9	152.4	155.3	-2.9
8月		18.1	19.8	-1.7	23.1	25.1	-2.0	13.8	15.7	-1.9	236.0	138.4	97.6	115.8	135.8	-20.0
9月		15.8	15.8	0.0	22.0	21.7	0.3	10.3	10.7	-0.4	28.0	122.8	-94.8	171.7	158.5	13.2
10月		9.4	8.3	1.1	15.6	14.5	1.1	4.2	2.8	1.4	133.0	69.9	63.1	151.9	165.6	-13.7
11月(中旬まで)		4.7	2.8	1.9	10.1	8.1	2.0	-0.1	-1.9	1.8	10.5	46.9	-36.4	82.7	84.0	-1.3

注) 観測値は置戸町境野のアメダスによる(てん蔵の定期作況気象情報)。10年平均は前10か年の平均値である。

4) 季節表および農耕期間の平均気温、降水量、日照時間の積算値

年次	初霜 (年.月.日)	根雪始 (年.月.日)	根雪終 (年.月.日)	積雪期間 (日)	降雪終 (年.月.日)	耕鋤始 (年.月.日)	晩霜 (年.月.日)	初霜 (年.月.日)	無霜期間 (日)	降雪始 (年.月.日)
本年	H29.10.17	H29.11.18	H30.4.2	136	H30.4.16	H30.4.23	H30.5.21	H30.10.18	149	H30.11.19
平年	10.12	12.6	4.9	125	5.2	4.28	5.6	10.12	158	10.30
比較	5	-18	-7	11	-16	-5	15	6	-9	20

項目		平均気温 (°C)	降水量 (mm)	日照時間 (hr)
5月上旬 ~ 9月下旬	本年	2378	631	742
	平年	2466	505	790
比較		-88	126	-48

注) 農耕期間の積算値は置戸町境野のアメダスにより、それ以外は北見農試観測値である。平年値は前10か年の平均値である。

2 当場の作況

注) 本作況報告は北海道立総合研究機構北見農業試験場の平年値に対する生育良否に基づいたものであり、網走管内全体を代表するものではありません。

1) 秋まき小麦（平成29年9月播種）

作況：不良

事由：9月中旬は降水量が多く畑の耕起が遅れたことから、播種は平年より5日遅い9月22日となった。出芽期は平年より5日遅い9月30日であった。出芽後、10月中旬の平均気温が平年より極めて低かったため、越冬前（11月20日）の草丈、茎数は平年を下回った。根雪始は平年より18日早い11月18日、融雪期は平年より7日早い4月2日で、根雪期間は平年より11日長かった。調査圃場は融雪剤を散布したため、融雪期が観測点より6日早い3月27日で、雪腐病の発生は少なかった。

融雪期以降、4月の平均気温は平年より高く、5月は平年並に経過したため、生育は進み、出

穂期は平年より3日早い6月6日であった。6月中旬と7月上旬の平均気温は平年より極めて低かったため、開花および登熟の進捗は緩慢となり、成熟期は平年より5日遅かった。6月中旬から7月上旬の降水量が多かったことから、赤かび病がわずかに発生した。開花、結実時期の6月下旬から7月上旬の日照時間は少なかった。稈長は平年よりやや短く、穂長は平年並、穂数は少なかった。倒伏は発生しなかった。リットル重は平年並で、千粒重は平年を上回ったが、穂数が少なかったことから、子実重は平年比91%であった。検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	きたほなみ		
	本年	平年	比較
播種期 (平成29年月・日)	9.22	9.17	5
出芽期 (平成29年月・日)	9.30	9.25	5
出穂期 (平成30年月・日)	6.6	6.9	△3
成熟期 (平成30年月・日)	7.30	7.25	5
草丈(cm) (平成29年11月20日)	12.1	18.5	△6.4
草丈(cm) (平成30年5月20日)	38.4	37.4	1.0
草丈(cm) (平成30年6月20日)	85.1	91.2	△6.1
茎数(本/㎡) (平成29年11月20日)	840	1258	△418
茎数(本/㎡) (平成30年5月20日)	1573	1486	87
茎数(本/㎡) (平成30年6月20日)	719	758	△39
稈長(cm) (成熟期)	79	84	△5
穂長(cm) (成熟期)	8.7	8.8	△0.1
穂数(本/㎡) (成熟期)	663	735	△72
子実重(kg/10a)	654	722	△68
同上平年比 (%)	91	100	△9
リットル重 (g)	805	800	5
千粒重 (g)	41.9	38.8	3.1
品質 (検査等級)	1	1	-

注) 平年値は前7か年中、平成27年（最豊）、29年（最凶）を除く5か年の平均。

2) 秋まき小麦 (平成30年9月播種)

作 況 : やや良

事 由 : 播種は平年より2日早い9月14日に行った。出芽期は平年より3日早い9月22日であった。出芽後、平均気温は平年より高く推

移したため生育は良好で、やや過繁茂だが越冬前の草丈、茎数は平年を大きく上回っている。

以上のことから、目下の作況は「やや良」である。

調査項目	きたほなみ		
	本年	平年	比較
播種期 (平成30年月.日)	9.14	9.16	△2
出芽期 (平成30年月.日)	9.22	9.25	△3
草丈(cm) (平成30年11月20日)	24.3	17.2	7.1
茎数(本/m ²) (平成30年11月20日)	1932	1142	790

注) 平年値は前7か年中、平成27年(最豊)、30年(最凶)を除く5か年の平均。

3) 春まき小麦

作 況：やや不良

事 由：調査圃場は融雪剤散布により3月27日に融雪期となった。3月下旬から4月上旬の降水量は少なく圃場の乾燥が進んだことから、播種期は平年より4日早い4月13日となった。播種後の4月中下旬の平均気温は平年より高く推移し、出芽期は平年より3～6日早かった。5月中旬から6月上旬の平均気温は平年よりやや高かったため生育が進んだが、6月中旬の気温が極めて低かったことから生育は緩慢となった。出穂期は平年より1～2日早かった。開花後の6月下旬以降に降水量が多かったことから赤かび病が多く発生した。また、開花

期の7月上旬が低温で日照時間が少なかったことから、不稔となる小花が認められた。8月上旬の平均気温はやや低く、成熟期は平年より4～6日遅くなった。「春よ恋」では8月9日の降雨で倒伏が発生したが軽微であった。稈長は平年並で、穂長はやや長く、穂数は多かった。赤かび病や不稔の発生の影響により、子実重は平年比95～99%で、リットル重は平年を下回った。千粒重は平年並であった。「春よ恋」では発芽粒がごくわずかに認められた。検査等級は1等であった。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目	春よ恋			はるきらり			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月・日)	4.13	4.17	△ 4	4.13	4.17	△ 4	
出芽期 (月・日)	4.26	5.2	△ 6	4.30	5.3	△ 3	
出穂期 (月・日)	6.21	6.23	△ 2	6.20	6.21	△ 1	
成熟期 (月・日)	8.9	8.5	4	8.12	8.6	6	
草丈(cm)	(5月20日)	21.2	15.5	5.7	24.0	15.7	8.2
	(6月20日)	68.9	69.4	△ 0.4	67.4	69.3	△ 1.9
茎数(本/m ²)	(5月20日)	611	457	154	603	435	168
	(6月20日)	788	822	△ 34	783	813	△ 30
稈長(cm) (7月20日)	95	97	△ 2	91	94	△ 3	
穂長(cm) (7月20日)	8.8	8.0	0.8	8.0	7.4	0.6	
穂数(本/m ²) (7月20日)	738	595	142	711	609	102	
子実重(kg/10a)	493	518	△ 25	513	517	△ 4	
同上平年比 (%)	95	100	△ 5	99	100	△ 1	
リットル重 (g)	776	806	△ 31	790	805	△ 16	
千粒重 (g)	40.8	39.4	1.4	43.5	41.4	2.0	
品質 (検査等級)	1	1	-	1	1	-	

注) 平年値は前7か年中、平成27年(最豊)、29年(最凶)を除く5か年の平均。

4) とうもろこし (サイレージ用)

作 況：不良

事 由：播種期は平年並の5月16日で、出芽期は平年より2日遅い6月1日であった。出芽後は6月中下旬および7月中旬の気温が平年より極めて低く推移したため、開花期は平年より5日、抽糸期は平年より7日遅かった。抽糸期後も8月中下旬が低温で経過したため8月20日の草丈は平年より52.6cm、9月20日の稈長は平年

より24cmそれぞれ低かった。収穫期は平年より3日遅い9月27日であった。収穫時の子実の熟度は黄熟初期と平年並だったものの、総体の乾物率は平年よりやや低かった。乾物茎葉重、乾物雌穂重は平年より少なく、乾物総重および推定TDN収量はともに平年比82%と平年より極めて少なかった。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	チベリウス			
	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.16	5.16	0	
出芽期 (月.日)	6.1	5.30	2	
開花期 (月.日)	8.7	8.2	5	
抽糸期 (月.日)	8.8	8.1	7	
収穫期 (月.日)	9.27	9.24	3	
収穫時の熟度	黄熟初期	黄熟初期		
草丈 (cm)	(6月20日)	21.9	29.6	△7.7
	(7月20日)	98.6	171.3	△72.7
	(8月20日)	255.2	307.8	△52.6
稈長 (cm)	(9月20日)	248	272	△24
葉数 (枚)	(6月20日)	4.8	4.6	0.2
	(7月20日)	12.1	12.7	△0.6
	(8月20日)	15.4	15.0	0.4
生総重 (kg/10a)	5678	6800	△1122	
乾物茎葉重 (kg/10a)	815	942	△127	
乾物雌穂重 (kg/10a)	811	1032	△221	
乾物総重 (kg/10a)	1626	1974	△348	
同上平年比 (%)	82	100	△18	
推定TDN収量 (kg/10a)	1164	1425	△261	
同上平年比 (%)	82	100	△18	
総体の乾物率 (%)	28.6	29.1	△0.5	
乾雌穂重割合 (%)	49.9	52.4	△2.5	
有効雌穂割合 (%)	100.0	99.3	0.7	

注1) 平年値は前7か年中、平成23年 (最豊)、25年 (最凶) を除く5か年の平均。

注2) 推定TDN収量 = 乾物茎葉重 × 0.582 + 乾物雌穂重 × 0.850。

5) 大豆

作況：不良

事由：播種は平年並の5月22日に行った。出芽はやや遅れたが、出芽揃いは良好であった。出芽後は、6月中旬、7月上旬の気温が極めて低く推移したため生育は停滞し、開花始は平年より7日遅かった。7月下旬の高温多照により生育は一旦回復傾向となったが、8月中旬以降の低温により生育は再び停滞し、成熟期は

平年より5日遅い9月29日であった。主茎長、主茎節数、分枝数、着莢数はいずれも平年を下回り、一莢内粒数も平年を下回った。子実重は平年比82%と低収であった。百粒重は平年よりやや軽く、屑粒率は平年よりやや少なかった。検査等級は裂皮やしわ粒が少なく平年より優った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	ユキホマレ			
	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.22	5.22	0	
出芽期 (月.日)	6.5	6.2	3	
開花始 (月.日)	7.25	7.18	7	
成熟期 (月.日)	9.29	9.24	5	
主茎長 (cm)	(6月20日)	10.0	12.1	△ 2.1
	(7月20日)	38.9	55.4	△ 16.5
	(8月20日)	55.0	72.6	△ 17.6
	(9月20日)	52.9	73.9	△ 21.0
	(成熟期)	55.6	73.7	△ 18.1
本葉数 (枚)	(6月20日)	0.2	1.1	△ 0.9
	(7月20日)	4.8	7.8	△ 3.0
主茎節数	(8月20日)	10.0	11.3	△ 1.3
	(9月20日)	9.5	11.4	△ 1.9
	(成熟期)	9.7	11.3	△ 1.8
分枝数 (本/株)	(7月20日)	2.6	5.0	△ 2.4
	(8月20日)	5.8	5.9	△ 0.1
	(9月20日)	4.1	5.6	△ 1.5
	(成熟期)	4.9	5.5	△ 0.6
着莢数 (個/株)	(8月20日)	67.6	81.4	△ 13.8
	(9月20日)	63.4	70.8	△ 7.4
	(成熟期)	61.1	70.7	△ 9.6
一莢内粒数	1.75	1.91	△ 0.18	
子実重 (kg/10a)	305	371	△ 66	
同上平年比 (%)	82	100	△ 18	
百粒重 (g)	32.9	34.5	△ 1.6	
屑粒率 (%)	0.9	1.2	△ 0.3	
品質 (検査等級)	1	2上	—	

注1) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

2) 子実重は水分15%換算。

3) 品質(検査等級)は造りによる検査である。

6) 小豆

作況：やや不良

事由：播種は平年並の5月22日に行った。出芽期は平年並であったが、出芽後は低温に経過したため生育は停滞し、開花始は「サホロシヨウズ」で7日、「エリモシヨウズ」で5日遅れた。7月下旬の高温多照により生育はやや回復したが、8月中旬以降の低温により生育は再び停滞し、成熟期は平年と比べ「サホロシヨウズ」で24日、「エリモシヨウズ」で23日遅かった。主茎長、主茎節数、分枝数は、両品

種とも生育期間を通じ平年を下回って推移した。9月以降の気温は概ね平年並からやや高く経過したため登熟期間が平年に比べ長くなり、一莢内粒数は平年よりやや少なかったが、着莢数は平年並で、百粒重は平年より重く、子実重は平年並からやや上回った。しかし、降霜の影響で屑粒率は平年を大きく上回り、充実不良の子実も多かったため、検査等級は平年並から劣った。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目	サホロシヨウズ			エリモシヨウズ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.22	5.22	0	5.22	5.22	0	
出芽期 (月.日)	6.7	6.6	1	6.7	6.7	0	
開花始 (月.日)	7.29	7.22	7	7.29	7.24	5	
成熟期 (月.日)	10.13	9.19	24	10.17	9.24	23	
主茎長 (cm)	(6月20日)	2.7	4.3	△ 1.6	2.5	4.4	△ 1.9
	(7月20日)	10.3	20.9	△10.6	10.9	20.2	△ 9.3
	(8月20日)	53.0	77.7	△24.7	48.4	70.3	△21.9
	(9月20日)	64.5	83.3	△18.8	58.3	74.4	△16.1
	(成熟期)	60.9	85.2	△24.3	57.7	75.1	△17.4
本葉数 (枚)	(6月20日)	0.0	0.7	△ 0.7	0.0	0.6	△ 0.6
	(7月20日)	3.1	7.0	△ 3.9	3.1	7.1	△ 4.0
主茎節数	(8月20日)	12.5	13.7	△ 1.2	13.3	14.3	△ 1.0
	(9月20日)	13.8	13.9	△ 0.1	14.2	14.3	△ 0.1
	(成熟期)	13.1	14.0	△ 0.9	13.7	14.3	△ 0.6
分枝数 (本/株)	(7月20日)	0.0	2.4	△ 2.4	0.0	2.4	△ 2.4
	(8月20日)	1.9	4.4	△ 2.5	0.9	4.6	△ 3.7
	(9月20日)	3.5	4.0	△ 0.5	3.4	3.9	△ 0.4
	(成熟期)	3.2	3.8	△ 0.6	3.1	4.0	△ 0.9
着莢数 (個/株)	(8月20日)	13.3	48.7	△35.4	4.7	50.7	△46.0
	(9月20日)	50.4	54.2	△ 3.8	47.6	55.1	△ 7.5
	(成熟期)	53.9	52.8	1.1	52.5	55.6	△ 3.1
一莢内粒数	5.55	6.16	△0.61	6.20	6.50	△0.30	
子実重 (kg/10a)	373	374	△ 1	403	388	15	
同上平年比 (%)	100	100	0	104	100	4	
百粒重 (g)	17.7	14.8	2.9	16.9	13.9	3.0	
屑粒率 (%)	12.6	3.3	9.3	16.9	2.8	14.1	
品質 (検査等級)	4上	4上	—	4下	3下	—	

注1) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

2) 子実重と百粒重は水分15%換算。

3) 品質(検査等級)は素俵による検査である。

7) 菜豆

作況：不良

事由：播種は平年並の5月22日に行った。出芽期は平年並であったが、6月下旬以降の低温寡照傾向により、生育は停滞し、開花始は平年より7日遅い7月15日であった。開花後、7月下旬の高温多照により順調に着莢したが、8月中旬の低温により生育は再び停滞し、成熟期は平年より8日遅い9月9日であった。成熟期の草丈はかなり小さく、主莖節数と分枝数も

やや少なかった。着莢数は平年を上回り、一莢内粒数は平年並であったが、百粒重が平年をかなり下回っており、子実重は平年比90%と低収であった。小粒傾向に加え、8月下旬の降雨の影響から色流れ粒の発生もあり、屑粒率は平年より高かった。検査等級は小粒に加え腐敗粒が多く、平年より劣った。

以上のことから、本年の作況は「不良」である。

調査項目	大正金時			
	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.22	5.22	0	
出芽期 (月.日)	6.5	6.4	1	
開花始 (月.日)	7.15	7.8	7	
成熟期 (月.日)	9.9	9.1	8	
草丈 (cm)	(6月20日)	9.1	11.5	△ 2.4
	(7月20日)	27.5	44.7	△ 17.2
	(8月20日)	30.7	49.3	△ 18.6
	(9月20日)			
	(成熟期)	29.0	49.4	△ 20.4
本葉数 (枚)	(6月20日)	0.1	1.1	△ 1.0
	(7月20日)	3.5	3.4	0.1
主莖節数	(8月20日)	5.7	5.3	0.5
	(9月20日)			
	(成熟期)	5.6	5.3	0.3
分枝数 (本/株)	(7月20日)	4.7	5.5	△ 0.8
	(8月20日)	4.6	5.2	△ 0.6
	(9月20日)			
	(成熟期)	4.6	5.1	△ 0.5
着莢数 (個/株)	(8月20日)	22.1	21.0	1.1
	(9月20日)			
	(成熟期)	22.3	20.1	2.2
一莢内粒数	2.93	2.86	0.07	
子実重 (kg/10a)	285	316	△ 31	
同上平年比 (%)	90	100	△ 10	
百粒重 (g)	57.0	69.8	△ 12.8	
屑粒率 (%)	27.2	10.1	17.1	
品質 (検査等級)	4下	3中	—	

注1) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

2) 子実重と百粒重は水分15%換算。

3) 屑粒：[下屑粒]+[色流れ粒]。

4) 品質(検査等級)は素俵による検査である。

8) ばれいしょ

作 況：やや不良

事 由：植え付けは平年より3日早い5月9日に行った。萌芽期は平年並であったが、6月中旬の気温が低く経過したことから、開花始は平年より2～3日遅かった。茎長は両品種ともに平年並となった。

「男爵薯」では、7月下旬の高温干ばつにより黄変が進み、枯ちょう期は平年より8日早い8月23日であった。上いも平均重は平年より軽く、

上いも重は平年比94%であった。

「コナフブキ」では、枯ちょう期は平年より3日遅い10月7日であった。7月下旬の高温干ばつにより塊茎の肥大開始が遅れ、上いも平均重が平年より14g軽く、上いも重は平年比93%であった。9月上旬から9月下旬まで降水量が少なかったことから、でん粉価は平年より高く、でん粉重は平年比97%であった。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目	男爵薯			コナフブキ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
植付期 (月.日)	5.9	5.12	△3	5.9	5.12	△3	
萌芽期 (月.日)	6.2	6.2	0	6.3	6.3	0	
開花始 (月.日)	7.3	6.30	3	7.1	6.29	2	
枯ちょう期 (月.日)	8.23	8.31	△8	10.7	10.4	3	
茎長(cm)	(6月20日)	14.1	20.7	△6.6	11.2	21.7	△10.5
	(7月20日)	52	51	1	77	70	7
	(8月20日)	54	51	3	79	79	0
茎数(本/株)	(6月20日)	3.1	3.6	△0.5	3.0	3.0	0.0
	(7月20日)	3.9	3.9	0.0	3.8	3.5	0.3
上いも重(kg/10a)	(8月20日)	4522	4558	△36	3350	3819	△469
	(9月20日)	4357	4613	△256	3975	4797	△822
でん粉価(%)	(8月20日)	16.1	15.4	0.7	22.2	21.0	1.2
	(9月20日)	14.8	14.9	△0.1	22.8	22.0	0.8
でん粉重(kg/10a)	(9月20日)	—	—	—	867	1011	△144
上いも数(個/株)		11.4	10.6	0.8	11.1	10.5	0.6
上いも平均重(g)		86	99	△13	94	108	△14
上いも重(kg/10a)		4357	4613	△256	4646	5010	△364
同上平年比(%)		94	100	△6	93	100	△7
でん粉価(%)		14.8	14.9	△0.1	23.0	22.1	0.9
でん粉重(kg/10a)		—	—	—	1022	1058	△36
同上平年比(%)		—	—	—	97	100	△3

注) 平年値は前7か年中、平成24年(最豊)、29年(最凶)を除く5か年の平均。

9) てんさい

作 況：平年並

事 由：移植栽培の播種は、平年より2日遅い3月24日に行った。育苗期間中は平均気温が平年より高く推移したため、苗の生育は平年より旺盛であった。移植は、平年より3日早い5月2日に行った。移植の前後に降雨があったため、活着は順調であった。以降、気温が高めに推移したため、生育は順調であった。また、直播栽培の播種は、平年より3日早い5月2日に行なった。出芽期は、播種期を反映して、平年より3日早い5月15日であった。

6月中旬から7月中旬にかけては、低温と日照不足の影響で、生育がやや遅延した。7月下旬は高温傾向となり、日照時間も長かったため、

生育は回復したが、8月中旬からは低温傾向で経過し、9月に入ってからは降水量が平年より少なめに経過したことから、根重の増加が抑制された。

収穫は、平年より2日遅い10月22日に行った。9月下旬から、気温がやや高めに推移し、降水量も多かったため、根重はやや持ち直したが、平年には及ばなかった(平年比約95%)。一方、根中糖分は、8月中旬から9月中旬までが低温傾向であったため、平年を上回った(平年比約105%)。このため、糖量は、ほぼ平年並であった(平年比約100%)。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

表 その1

調査項目	移植						直播			
	リッカ			アマホマレ			リッカ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	3.24	3.22	2	3.24	3.22	2	5.2	5.5	△3	
移植期 (月.日)	5.2	5.5	△3	5.2	5.5	△3	-	-	-	
出芽期 (月.日)	-	-	-	-	-	-	5.15	5.18	△3	
収穫期 (月.日)	10.22	10.20	2	10.22	10.20	2	10.22	10.20	2	
草丈(cm)	(5月20日)	8.7	6.0	2.7	8.2	5.7	2.5	-	-	-
	(6月20日)	26.9	26.6	0.3	28.7	27.8	0.9	13.5	14.2	△0.7
	(7月20日)	53.0	54.8	△1.8	54.6	53.4	1.2	46.4	49.2	△2.8
	(8月20日)	58.9	59.5	△0.6	61.3	57.4	3.9	61.7	62.5	△0.8
	(9月20日)	62.5	60.1	2.4	62.6	59.1	3.5	63.4	62.9	0.5
生葉数(枚)	(5月20日)	5.8	4.8	1.0	5.5	4.1	1.4	-	-	-
	(6月20日)	12.0	11.1	0.9	12.5	11.4	1.1	9.2	7.5	1.7
	(7月20日)	18.0	18.4	△0.4	19.8	20.6	△0.8	14.8	15.6	△0.8
	(8月20日)	21.9	23.1	△1.2	26.0	25.8	0.2	22.4	21.6	0.8
	(9月20日)	27.8	24.4	3.4	30.4	27.5	2.9	26.4	22.0	4.4
茎葉重(g/個体)	(6月20日)	102	99	3	116	108	8	12	14	△2
	(7月20日)	551	556	△5	636	585	51	294	380	△86
	(8月20日)	762	746	16	941	830	111	803	773	30
	(9月20日)	799	659	140	942	782	160	745	740	5
根重(g/個体)	(6月20日)	21	16	5	31	24	7	1	1	△0
	(7月20日)	231	278	△47	271	292	△21	76	116	△40
	(8月20日)	748	769	△21	783	790	△7	512	551	△39
	(9月20日)	994	1135	△141	987	1122	△135	738	918	△180
根周(cm)	(7月20日)	21.6	22.7	△1.1	23.1	23.6	△0.5	14.3	16.9	△2.6
	(8月20日)	32.9	32.8	0.1	34.4	34.4	0.0	27.8	28.5	△0.7
	(9月20日)	37.1	37.1	0.0	38.0	39.1	△1.1	31.8	33.8	△2.0
根中糖分(%)	(9月20日)	-	15.24	-	-	15.68	-	-	14.66	-

表 その2

調査項目	移植						直播		
	リッカ			アマホマレ			リッカ		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
茎葉重 (kg/10a) (収穫期)	5162	3851	1311	6443	4458	1985	5691	4599	1092
根重 (kg/10a) (収穫期)	7438	7995	△ 557	7230	7464	△ 234	6160	6675	△ 515
同上平年比(%)	93	100	△ 7	97	100	△ 3	92	100	△ 8
根中糖分(%)	18.46	17.10	1.36	19.10	18.08	1.02	18.12	17.34	0.78
同上平年比(%)	108	100	8	106	100	6	104	100	4
糖量(kg/10a)	1381	1360	21	1380	1338	42	1116	1196	△ 80
同上平年比(%)	102	100	2	103	100	3	93	100	△ 7

注1) 平年値は前7か年中、平成26年(最豊)、28年(最凶)を除く5か年の平均。

注2) 9月20日の根中糖分は、分析機器修理のため測定できなかった。

10) 牧草(チモシー)

作況：平年並

事由：萌芽期は平年より5日早い4月17日であった。冬損程度は平年並、春の被度は100%であった。5月下旬から6月上旬にかけての気温が平年より高く推移したため、出穂始は平年より5日早く、出穂期は4日早かった。その後、6月中旬の気温が平年より極めて低く推移し、6月14日収穫の1番草は、草丈が平年より

8cm低く、乾物収量は平年比97%と平年並であった。8月3日収穫の2番草は、草丈と節間伸長程度は平年並で、乾物収量も平年比97%と平年並であった。10月3日収穫の3番草は、草丈は平年並で、乾物収量も平年比104%と平年並であった。1~3番草の年間合計乾物収量は、平年比98%と平年並であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

表 その1

調査項目		ノサップ		
		本年	平年	比較
萌芽期	(月.日)	4.17	4.22	△5
冬損程度		1.0	1.0	0
被度(%)	(5月18日)	100	100	0
	2番草再生時	100	100	0
出穂始	(月.日)	6.8	6.13	△5
出穂期	(月.日)	6.13	6.17	△4
出穂程度	1番草	5.8	8.2	△2.5
節間伸長程度	2番草	3.0	2.7	0.3
刈取日(月.日)	1番草	6.14	6.20	△6
	2番草	8.3	8.10	△7
	3番草	10.3	10.4	△1
倒伏程度	1番草	1.5	3.8	△2.3

表 その2

調査項目		ノサップ		
		本年	平年	比較
病害罹病程度	1番草	1.0	1.3	△0.3
	2番草	4.0	3.5	0.5
	3番草	4.5	2.9	1.6
草丈(cm)	(5月18日)	43	33	10
	(6月5日)	86	69	17
	1番草	94	102	△8
	2番草再生時	37	36	1
	2番草	53	57	△4
	3番草再生時	46	42	4
	3番草	39	43	△4
生草収量(kg/10a)	1番草	2638	2914	△276
	2番草	557	756	△199
	3番草	749	637	112
	合計	3944	4307	△363
乾物率(%)	1番草	22.4	21.4	1.0
	2番草	30.9	23.8	7.1
	3番草	21.9	26.2	△4.3
乾物収量(kg/10a)	1番草	590	608	△18
	同上平年比(%)	97	100	△3
	2番草	172	177	△5
	同上平年比(%)	97	100	△3
	3番草	163	156	7
	同上平年比(%)	104	100	4
	合計	925	941	△16
	同上平年比(%)	98	100	△2

注1) 平年値は前7か年中、平成24年(最豊)、平成27年(最凶)を除く5か年の平均。

注2) 冬損程度、倒伏程度および病害罹病程度は、1:無または微~9:甚で、病害は主に斑点病。
出穂程度および節間伸長程度は、1:無~9:極多。

注3) 6月5日の草丈の平年値は、平成29年が欠測のため、前7か年中、平成24年(最豊)、27年(最凶)を除く4か年の平均。

11) たまねぎ

作 況：やや不良

事 由：播種は、早生種「オホーツク 222」では平年より1日遅い3月2日、中生種「北もみじ 2000」では平年より3日早い3月8日に行った。苗の生育は概ね順調であり、移植は、両品種とも平年並の5月1日および5月9日に行った。移植後、5月中下旬の降水量は平年より少なく、6月中旬の気温は極めて低く推移したため生育はやや遅れ気味であった。6月20日における生育は、「オホーツク 222」では生葉数および葉鞘径は概ね平年並であるものの、草丈は平年をやや下回った。「北もみじ 2000」も葉鞘径は平年並であるものの、草丈および生葉数は平年をやや下回った。6月下旬から7月上旬の低温寡照により球肥大は遅れた。さらに6月中旬から降水量が多かったため7月上旬から軟腐

病などの発生が認められた。7月20日における生育は、両品種とも草丈および葉鞘径、葉身生重は概ね平年並であるものの、生葉数はやや少なく、球生重は平年を下回った。倒伏期は、「オホーツク 222」では平年より1日早く、「北もみじ 2000」では3日遅かった。8月20日における一球重は、両品種とも平年をやや下回った。枯葉期は「オホーツク 222」ではやや遅く、「北もみじ 2000」では概ね平年並であった。平年と比べて、両品種とも平均一球重はやや軽く、総収量はやや下回った。変形球等により規格内率はやや低く、規格内収量は「オホーツク 222」では平年を下回り、「北もみじ 2000」ではやや下回った。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目	オホーツク 222			北もみじ 2000			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	3. 2	3. 1	1	3. 8	3.11	△3	
出芽期 (月.日)	3.16	3.14	2	3.20	3.23	△3	
移植期 (月.日)	5. 1	4.30	1	5. 9	5.10	△1	
球肥大期 (月.日)	7.17	7.11	6	7.21	7.19	2	
倒伏期 (月.日)	7.29	7.30	△1	8.8	8.5	3	
根切日 (月.日)	8.13	8.12	1	8.23	8.24	△1	
枯葉期 (月.日)	8.24	8.21	3	8.28	8.27	1	
収穫期 (月.日)	9. 3	8.30	4	9. 7	9. 8	△1	
草丈(cm)	移植時	21.8	21.6	0.2	21.9	22.2	△0.3
	(6月20日)	42.0	47.7	△5.7	33.6	36.4	△2.8
	(7月20日)	90.6	86.7	3.9	89.0	85.0	4.0
生葉数(枚)	移植時	2.6	2.8	0.2	3.0	3.0	0
	(6月20日)	6.6	6.8	△0.2	5.4	5.8	△0.4
	(7月20日)	8.8	9.7	△0.9	8.6	9.5	△0.9
葉鞘径(mm)	移植時	4.1	3.7	0.4	3.4	3.8	△0.4
	(6月20日)	12.5	12.5	0	9.7	9.7	0
	(7月20日)	23.4	22.1	1.3	21.7	21.3	0.4
葉身生重(g)	(7月20日)	166.3	175.4	△9.1	138.9	143.1	△4.2
球生重(g)	(7月20日)	57.3	108.8	△51.5	44.1	63.9	△19.8
	(8月20日)	251.9	279.3	△27.4	218.5	256.7	△38.2
総収量(kg/10a)		7091	7974	△883	6795	7292	△497
規格内収量(kg/10a)		5685	6951	△1266	5905	6661	△756
同上平年比(%)		82	100	△18	89	100	△11
規格内率(%)		80	87	△7	87	92	△5
平均一球重(g)		237	261	△24	224	239	△15

注) 平年値は前7か年中、平成23年(最豊)、25年(最凶)を除く5か年の平均。

付表1 各作物の耕種概要

作物名	一区面積 (m ²)	反復	前作物	畦幅 (cm)	株間 (cm)	一株本数	播種粒数 (粒/m ²)	播種量 (kg/10a)	株数 (株/10a)
1. 秋まき小麦	7.2	4	緑肥大豆	30.0	条播	-	255	-	-
2. 春まき小麦	6.0	4	緑肥大豆	30.0	条播	-	340	-	-
3. とうもろこし	11.2	3	緑肥えん麦	75.0	17.8	1	-	-	7,491
4. 大豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
5. 小豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
6. 菜豆	9.6	3	緑肥そば	60.0	20.0	2	-	-	8,333
7. ばれいしょ	37.8	3	緑肥えん麦	75.0	30.0	1	-	-	4,444
8. てんさい	39.6	3	緑肥野生えん麦	60.0	23.8	1	-	-	7,003
9. 牧草 (チモシー)	2.7	4	緑肥えん麦	30.0	条播	-	-	2.0	-
10. たまねぎ	10.0	2	たまねぎ	30.0	10.5	1	-	-	31,750

付表2 各作物の耕種概要

作物名	施肥量 (kg/10a)						備考
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	MgO	堆肥	その他	
1. 秋まき小麦	6.0	20.0	9.7	3.8		起生期追肥 N: 3.0	H27年より変更 2年目草地 年間3回分施
2. 春まき小麦	10.0	18.0	12.0	5.0			
3. とうもろこし	14.0	22.0	12.0	4.0	3,000	炭カル:150	
4. 大豆	1.8	15.0	7.8	3.0			
5. 小豆	4.0	20.0	11.2	4.0			
6. 菜豆	4.0	20.0	11.2	4.0			
7. ばれいしょ	8.0	20.0	14.0	5.0			
8. てんさい	14.7	29.4	12.0	6.7			
9. 牧草 (チモシー)	15.0	15.0	15.0	3.0			
10. たまねぎ	15.0	15.0	10.0	1.3			

Ⅲ 試験研究および地域支援活動の概要

1 研究部の概要

(1) 麦類に関する試験

麦類グループ(育種)は、秋まき小麦および春まき小麦の新品種育成やそれに係わる栽培試験、二条大麦の適応性検定試験および除草剤などの資材試験を実施している。

小麦では、「小麦品種開発事業」、「イノベーション創出強化研究推進事業(旧農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業)(課題番号26097C)」、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進」等の各試験研究課題により高品質で耐病性および穂発芽耐性に優れた品種の育成を進めている。「奨励品種決定調査」では秋まき小麦の「北見92号」、「北見94号」、「北見95号」、「北見96号」、春まき小麦では「北見春79号」および「北見春81号」を供試し、「北見92号」、「北見94号」、「北見95号」、「北見96号」、「北見春79号」を試験継続とした。春まき小麦「北見春82号」を新配付系統とした。「春まき小麦の品種選定試験」ではホクレン農総研育成の「HW8号」など6系統について適応性を検討した。

二条大麦では、「イノベーション創出強化研究推進事業(旧農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業)(課題番号28038C)」により適応性検定試験を行い、「札育5号」、「札育6号」を試験中止とし、「札育7号」を新配布系統とした。

(2) ばれいしょに関する試験

作物育種グループ(馬鈴しょ)は、でん粉原料用、加工用等の新品種育成並びに栽培試験を実施している。

ばれいしょ新品種育成に関する試験は「馬鈴しょ品種開発事業」および「実需者ニーズに対応した病害虫抵抗性で安定生産可能なバレイショ品種の育成」の試験研究課題により、安定多収な品種の育成を進めている。また、「北海道畑作で新たに発生が認められた難防除病害虫ジャガイモシロシストセンチュウおよびビート西部萎黄ウイルスに対する抵抗性品種育成のための先導的技術開発」ではジャガイモシロシストセンチュウ抵抗性を有する

でん粉原料用品種の育成、ホクレンとの共同研究課題「トヨシロ」置き換えの加工用馬鈴しょ品種の育成促進」では熟期の早い加工用品種育成の強化に取り組んでいる。

選抜効率の向上については、「早期肥大性に優れるでん粉原料用馬鈴しょ品種の開発強化」で中期世代の9月上旬収穫による早期肥大性の評価、有望系統の栽培特性および主産地適応性を評価し、普及性の高い有望系統開発を強化している。「DNAマーカー選抜による馬鈴しょ耐病虫性系統の開発強化」では育成3年目の系統について、ジャガイモシロシストセンチュウとジャガイモYウイルスのDNAマーカーによる選抜を実施している。「馬鈴しょの農業形質に関連したDNAマーカーの探索と有効性検証」では、海外で農業形質との関連が報告されているDNAマーカーの有効性検証に向けて、材料養成と解析を行っている。

品質の向上については「でん粉原料用馬鈴しょにおける低離水率・低リン系統の開発強化」、「長期貯蔵向けポテトチップ用馬鈴しょ系統の開発強化」により、でん粉品質並びにチップ加工適性の優れる品種の開発促進を行っている。

耐病性の向上については「馬鈴しょそうか病抵抗性系統の開発強化」、「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の開発強化」の各試験研究課題により、前出の課題と合わせて耐病虫性(ジャガイモシロシストセンチュウ、そうか病、疫病、Yウイルス病)に優れる品種の開発促進を進めている。

「奨励品種決定調査」では、でん粉原料用「北育26号」、加工用「北育27号」および業務用「北育24号」、「北育28号」について検討し、「北育24号」が北海道優良品種に認定され、「北育28号」を継続検討とした。「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」では、民間育成2系統について生産力検定並びに病害虫抵抗性検定を行った。

(3) 牧草・飼料作物に関する試験

作物育種グループ(牧草)では、チモシー新品種育成試験、牧草・飼料作物の系統評価、

品種比較試験、栽培試験などの資材試験を実施している。

「チモシー品種開発事業」では、収量性、競合力、耐倒伏性、飼料成分、耐病性などの改良を目標として、チモシー有望系統の開発に取り組んでいる。また、北海道農業研究センターが育成したオーチャードグラス2系統、アルファルファ3系統、サイレージ用とうもろこし1系統のオホーツク地域での適応性検定試験を実施した。ホクレンとの共同研究「安定的なチモシー草地維持に貢献する高競合力を備えた高品質・多収品種の開発強化」では、チモシーの中生育成系統の特性検定試験、地域適応性検定試験および飼料成分分析と、早生育成系統の採種を実施した。(一社)日本草地畜産種子協会との共同研究「広域適応性チモシー品種の開発促進」では、早生選抜個体の多交配後代系統の後代検定試験を実施した。民間受託試験「飼料作物品種比較試験」では、牧草5草種とサイレージ用とうもろこしの品種比較試験を実施した。サイレージ用とうもろこしでは、「KD421」および「TH1475」が北海道優良品種に認定された。また、「高精度播種に対応したチモシー主草地の安定造成播種量の設定」は、指導参考事項に認定された。

(4) 栽培環境に関する試験

生産環境グループ(栽培環境)は、土壤肥料(資材試験を含む)および環境保全に関する研究を実施している。

本年度は、終了課題「飼料用とうもろこしに対する塩化カリ肥料の施用効果」を成果名「飼料用とうもろこしに対する加里質肥料「塩化加里」の施用効果」としてとりまとめて北海道農業試験会議(成績会議)に提出し、平成30年指導参考事項に採択された。

継続課題としては、「常呂川流域圏における人間活動と水・物質循環とのつながりの解明」(中央農試、環境研、地質研、さけます内水試、林業試、北総研と共同)、「環境保全型有機質資源施用基準設定調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、根釧農試と共同)、「農地土壤炭素貯留等基礎調査事業」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、根釧農試と共同)、「飼料用とうもろこしに対する窒素分施効果の変動要因の解明」(根釧農試

と共同)、「土壤凍結深制御手法の高度化・理化学性改善技術への拡張と情報システムの社会実装 2) 土壤凍結深制御手法による土壤理化学性改善効果の現地実証および技術体系化」(十勝農試、北農研、JAきたみらい、十勝農協連と共同)、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進 3) 栽培改善による生産および品質の安定化 (1) 秋まき小麦『きたほなみ』の子実タンパク質含有率安定化のための気象情報対応型窒素施肥法」(中央農試、十勝農試と共同)、「農作物病害虫診断試験②生理障害診断試験」、「道営農業農村整備事業等に係る土壤調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、根釧農試、花野センターと共同)、「オホーツク地域における客土材の土壤分析」を実施した。

本年度から新たに実施した課題はない。

(5) 病害虫に関する試験

生産環境グループ(病虫)は、畑作物および園芸作物の病害虫防除対策試験、農作物病害虫診断試験、新農業資材実用化試験(新農薬効果査定試験)および病害虫発生予察事業を実施している。

前年度から継続して実施した課題は、「病害虫発生予察調査」(中央農試、上川農試、道南農試、十勝農試、花野センターと共同)、「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」(そうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定。作物育種G、中央農試、上川農試、十勝農試、道南農試と共同)、「実需者ニーズに対応した病害虫抵抗性で安定生産可能なバレイショ品種の育成」(そうか病、塊茎腐敗およびジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定。作物育種G、中央農試と共同)、「馬鈴しょ疫病圃場抵抗性系統の開発強化」(作物育種G、十勝農試と共同)、「ジャガイモシロシストセンチュウの効果的な防除法の開発 1 ジャガイモシロシストセンチュウの大規模ほ場における防除技術体系の確立 (1) 化学的防除の実施と効果の検証 (3) 物理的防除による感染源の低減効果の検証」(北農研、北海道と共同)、「直播栽培を主としたテンサイ黒根病防除対策の検討」(地域技術Gと共同)である。

本年度から新たに実施した課題は「たまねぎ早期立枯れ症状の緊急防除対策」である。

また、単年度試験の「GP抵抗性有望系統の特性検定及び現地試験業務」（作物育種G、中央農試と共同）を実施した。

新資材試験では、殺菌剤5剤が北海道農業試験会議（成績会議）において指導参考事項に採択された。

(6) 畑作物および野菜に関する試験

地域技術グループは豆類やてん菜などの畑作物および野菜類の新品種育成・栽培法改善試験、除草剤などの資材試験を実施している。

豆類では、大豆系統適応性検定試験を、「地域適応性検定試験」として場内圃場で十系統の適応性の検定を行った。「奨励品種決定基本調査」で大豆の十育系統2系統、「地域適応性検定試験」で小豆の十育系統3系統、菜豆の十育系統2系統の検定を行った。「新優良品種普及促進事業」では、大豆の新品種1品種、菜豆の金時系統1系統を作付けし、種子生産を行った。公募型研究では、小豆で「道東の早生小豆栽培地域における生産安定性の向上」として、早生小豆品種のオホーツク地域向け栽培密度指針の確立に向けた場内・現地調査を行った。高級菜豆では、花豆試験として「花豆の疎植栽培による省力安定生産技術の開発」で、場内および現地栽培試験を実施し、現地試験では、十勝農試生産システムグループと共同で作業時間調査等も行った。

てん菜の品種選定では、「てん菜輸入品種検定試験」として、民間育成の9系統、「気候変動に対応したテンサイの安定生産を可能にする高度病害抵抗性品種の開発」として、北農研育成の2系統を検定した。輸入系統は、継続検討が6系統、廃棄が3系統である。北農研の系統は継続検討が1系統、廃棄が1系統である。

てん菜病害に対する試験では、「直播栽培を主としたテンサイ黒根病防除対策の検討」で、黒根病の発生条件の検討と現地実態調査を行った。本年も、病気が発生しにくい条件であったため、黒根病は少発生に止まった。防除試験では、薬剤防除試験および畦間サブソイラ試験で、あまり大きくなかったものの処理区間で有意な差がみられた。現地実態調査は北見市と美幌町の排水不良圃場6箇所で行ったが、北見農試と同様に少発生に止まった。

てん菜の根中糖分を非破壊で測定する試みである「近赤外分光法によるてん菜の根中糖分非破壊評価技術の開発」では、北見農試より20品種11株ずつ根部サンプルを、昨年から改良した光センサー使って、HKNエンジニアリングで行われる近赤外分析に供試し、その後慣行の糖分分析を北見農試で行って、中央農試にて検量線の作成と精度検証を行った。精度を示す予測標準誤差SEPは、今年の1.084%から0.64%に向上した。

たまねぎについて、「加工・業務用たまねぎ中生系統の作出と評価」では、共同研究におけるF1育成において、長球形質を有する北見農試5系統の特性を確認した。「オホーツク地域向けたまねぎ極早生品種の探索」では、民間育成の15品種について、早期は種作型における特性を確認するとともに、乾腐病抵抗性や内部品質を評価した。「早期出荷向けたまねぎの収穫前進技術の開発」では、「北はやて2号」、「バレットベア」を用いて、播種時期等を変えた苗質の違いによる生育への影響、根切り時期の違いが枯葉期や肥大性、収量性に与える影響について調査した。「たまねぎ直播栽培の球肥大改善のための窒素分施肥技術の開発」では、窒素の基肥-分施肥配分や分施肥時期の違いによる肥大性への影響を調査するとともに、分施肥後のかん水処理による効果が分施肥時期の降水量と関係することを確認した。

新資材試験は、大豆除草剤1剤、たまねぎ除草剤2剤を検討した。

(7) 地域支援活動

オホーツク地域農業支援会議では、技術普及室、網走農業改良普及センター、オホーツク総合振興局農務課とともに、事務局会議3回、5者会議ならびに地域関係者会議を開催し、地域ニーズの調査・対応等を行った。プロジェクト課題として、「輪作体系再構築関係」、「ICTを活用した省力化機械の導入効果等の検証」の2課題を関係機関と連携して取り組んだ。また、個別の地域要望や普及センターからの支援要請等については、研究部各グループと技術普及室が連携して対応を行った。

2 技術普及室の活動

a 専門項目に関する普及センターの支援

技術的な問い合わせなどへの対応の他、普及センターからの支援要請に基づいたテーマについて対応した。

耕種・園芸については、①畑作物及び園芸作物の安定生産(土壌凍結促進技術の導入)、②規模拡大への対応～整地方法の見直し(簡易耕起)、③でん粉原料用ばれいしょにおける低収要因の解明、④秋まき小麦のタンパク改善に向けた取り組みの支援(4Hクラブ)、⑤ばれいしょの安定生産技術の確立、⑥高品質な種子ばれいしょ生産に向けた技術支援、⑦かぼちゃの安定生産・収穫機械、栽培技術、⑧西興部村役場から道の駅花夢の花壇試験植栽について支援した。

植物保護については、①コムギなまぐさ黒穂病の情報提供と発生実態調査、②小かぶ栽培におけるヒメダイコンバエの効果的な防除法について、③ジャガイモシストセンチュウ蔓延防止に向けた意識啓発、④病虫害被害等の軽減によるブロッコリーの収量維持について支援した。

経営については、①経営シミュレーションによる分析結果の検討、②適正な労務管理に向けた目標所得の明確化、③放牧酪農における搾乳ロボットの利用方法検討、④経営の見える化ツール活用支援(経営管理支援のあり方の検討)、⑤比布町経営分析と改善方向検討に向けた支援、⑥クミカン・青色申告決算書等を活用した「経営の見える化ツール」手法の習得、⑦TMRセンターの経営分析及び診断手法について支援した。

ICTについては、①衛星データを活用した秋まき小麦に対する可変施肥の導入検討、③若手農業者及び新規参入者への支援(道内のスマート農業に関わる情報提供)について支援した。

地域改題解決研修については、①畑作経営における大豆導入の優位性についての検証、②大豆の安定生産技術の検討、③バイオガスプラント消化液の肥料効果と作物に与える影響、⑤家畜による農作業事故発生防止に向けた対策の検討、⑥センシング画像解析による技術提案手法の検討、⑦GAP導入支援における指導手法の調査研究、⑧効率的・効果的な普及活動手法等の検討、⑨オホーツク管内の酪

農・畜産における省力化技術の現状と課題及び普及の役割について支援を行った。

畜産については、①肉牛繁殖経営における分娩間隔短縮への支援手法、②乳成分・乳質向上に向けた支援手法、③肥育牛に対する肉質診断、④はまなす育成牧場の放牧地管理技術の改善については、他担当普及室から支援を要請した。

高付加価値については、①高付加価値化における基礎研修及びFCPに関する情報提供については、他担当普及室から支援を要請した。

人材育成については、①新任職員に対する研修、②人材育成に対する支援を行った。

害虫や自然災害等の緊急事態に対する対応や突発性病害、生理障害の診断および研究要望事項のうちで既往の成果があるとされたものに対する支援など多岐にわたった。

b 調査研究の実施

調査研究は4課題である。

1つ目は、「秋まき小麦のなまぐさ黒穂病の防除対策の確立」である。オホーツク管内のなまぐさ黒穂病の発生状況については年々減少傾向となっており、試験研究で取り組まれたフロンサイドの成果の貢献が見られる。現地における発病サンプルを農協連、振興局の協力を得て作成、配布することが出来た。対策として、輪作、種子消毒、茎葉散布により防除効果が期待できる。

2つ目は、「精漿成分を活用した牛受胎率向上技術の経済効果算出」である。畜産試験場及び北海道大学と連携し、「経産牛1頭当たり経済性算出シート」を作成し、精漿成分を活用した牛受胎率向上技術の経済効果について算出した。畜産試験場では、北海道農業試験会議(設計会議)で、経済効果について報告された。

3つ目は、「衛星リモートセンシングデータの分析と活用の検討」である。小麦などの生育を可視化し可変施肥をする場合、搭載型生育センサー(CropSpec)の過去の知見はあるが、近年、安価な衛星リモートセンシング(NDVI)が普及しているためデータの比較検討が必要である。そこで、CropSpecと衛星NDVIのデータを比較し、衛星NDVIに置き換えが可能かを検証した。また、グリーンシーカー(NDVI)で

推定した茎数について、衛星NDVIと比較検討した。

4つ目は、「大規模畑作経営における簡易耕起による省力化と輪作の検討」である。春作業の適期実施に向けた「簡易耕起」が主要作物の生育・収量・病害発生量に与える影響について調査した。「簡易耕起」により、生育・収量・労働生産性の向上が見られたが、複数年の実施による病害発生量について課題が残った。今後は、病害虫発生量を中心に調査について、継続した調査が必要である。

c 地域農業支援会議活動

オホーツク地域農業支援会議の活動で、プロジェクト課題2課題「輪作体系再構築に向けた検討」「ICTを活用した省力化機械の導入効果等の検証」について取り組んだ。

また、技術体系化チームの活動はなかった。

d 農業試験場における普及指導員の研修実施

本年度の高度専門技術研修(畑作)は3期に分けて開催され、北見農試においては前期(6月4日から3日間)の対応を行った。

e 農業協同組合等の営農指導機能強化の支援

JA営農指導員研修(耕種部門)は、7月17日、9月28日に実施した。北見農試技術普及室が担当した項目は、「農薬・病害虫防除の基礎知識」、「GPS・GISの基礎知識」である。

IV 研究発表および普及事項

1 研究発表

1) 研究論文

- 黒崎英樹・大西志全・湯本節三・白井滋久・松川 勲. 側状花房が発達する特性導入による北海道におけるダイズの障害型耐冷性向上. 日本作物学会紀事 87(4):304-311 (2019).
- Shun Sakuma, Guy Golan, Zifeng Guo, Taiichi Ogawa, Akemi Tagiri, Kazuhiko Sugimoto, Nadine Bernhardt, Jonathan Brassac, Martin Mascher, Goetz Hensel, Shizen Ohnishi, Hironobu Jinno, Yoko Yamashita, Idan Ayalon, Zvi Peleg, Thorsten Schnurbusch, and Takao Komatsuda. Unleashing floret fertility in wheat through the mutation of a homeobox gene. PNAS <https://doi.org/10.1073/pnas.1815465116> 116(11):5182-5187 (2019. 2. 21).
- 足利和紀・出口健三郎・田中常喜. チモシーのリードカナリーグラスとのアレロパシーに関する遺伝率. 北海道畜産草地学会報 6:112 (2018).
- 足利和紀・出口健三郎. チモシー (*Phleum pratense* L.) における地下茎型イネ科雑草とのアレロパシーに関する品種間差異. 日本草地学会誌 64:244-253 (2019).
- 中辻敏朗. 気候変動に伴い顕在化してきた作物栽培管理における問題と適応技術 II. 作物栽培において予測される問題 3. 地球温暖化が北海道の主要作物に及ぼす影響とその対応方向 -2030年代の予測-. 日本土壌肥科学雑誌 89(6):483-490 (2018).
- 江口定夫・柴田英昭・種田あずさ・新藤純子・松本成夫・森 昭憲・中島泰弘・朝田 景・志村もと子・林 健太郎・中辻敏朗. 食料生産～消費過程における窒素利用率と環境への窒素負荷 -消費者影響の重要性と活用方向-. 日本土壌肥科学雑誌 89:249-259 (2018).
- 八木哲生・唐 星児・大塚省吾・松本武彦・酒井 治・中辻敏朗・小野寺政行・三枝俊哉. 北海道における飼料用トウモロコシの適正な作条基肥窒素量. 日本土壌肥科学雑誌 89:384-389 (2018).
- 八木哲生・唐 星児・大塚省吾・松本武彦・酒井 治・中辻敏朗・小野寺政行・三枝俊哉. 北海道における収量水準および窒素肥沃度に対応した飼料用トウモロコシの窒素施肥基準. 日本土壌肥科学雑誌 90:22-31 (2019).
- T. Ohki, T. Narabu, A. Kushida, K. Onodera, T. Fujimoto, K. Ito & T. Maoka. Molecular characterization of *Globodera pallida* found in Japan using ribosomal DNA and mitochondrial cytochrome b gene sequences. Journal of General Plant Pathology 84:230-236 (2018).
- 池谷美奈子. たまねぎの小菌核病の効率的防除対策. 植物防疫 73(3):162-166(2019).
- 池田幸子. 春掘ニンジンに発生する雪腐小菌核病と耕種的防除法. 植物防疫72(6):356-363(2018).
- 田中静幸. 第7回国際食用ネギ類シンポジウム (ISEA2015) に参加して. 北農 86(2):193-199(2019).
- 田中静幸・杉山 裕. 北海道東部で栽培されたタマネギ短日性品種の諸特性. 北海道園芸研究談話会報 (2019) (印刷中).

2) 口頭発表

- 神野裕信・其田達也・粕谷雅志・大西志全・小林史典・大野陽子・半田裕一・杉本和彦. ガンマ線照射処理コムギ集団からの種子休眠性変異体の選抜. 育種学研究 21(別1):194(2019.3).
- 鈴木孝子・堀田治邦・神野裕信・吉村康弘. 北海道におけるコムギ縞萎縮病の発生と抵抗性育種. 土壌伝染病談話会講演要旨 29:31-39(2018.10).
- 長澤幸一・伊藤美環子・田引 正・寺沢洋平・神野裕信・其田達也・八田浩一. クラブコムギ由来のグルテニンサブユニットの導入による北海道育成小麦系統のクッキー加工適性の向上. 日本食品科学工学会関東支部会. (市川市, 2019. 3. 9).
- 笠島真也・藤村竜也・伊藤博武・神野裕信・大西志全・高橋 肇. 北海道における秋播性コムギ新旧品種の小花別粒重. 日本作物学会講演会要旨集 246:108(2018.9).
- 笠島真也・伊藤博武・神野裕信・大西志全・高橋 肇. 北海道における秋播性多収コムギ品種「き

- たほなみ」の止葉葉身角度. 日本作物学会講演会要旨集 247:128(2019.3).
- 大西志全. 北見農試の最新のパン用有望系統. グルテン研究会(厚木市、2018.5.12-13).
 - 大西志全・前野慎司・佐藤三佳子・来嶋正朋・足利奈奈・其田達也・菅原 彰・藤田涼平・神野裕信. 道総研作況調査からみた2018年産小麦の低収要因と地域間差. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 59:80-81(2018.12).
 - 大西志全・粕谷雅志・其田達也・森田耕一・神野裕信. コムギ育種における群落表面温度(CT)を使った収量性の間接選抜効果. 育種学研究 21(別1):131(2019.3).
 - 阿部珠代・大西志全・其田達也・足利奈奈. 近赤外分光法を利用した小麦育成系統のパン加工適性(吸水性)の評価. 第34回近赤外フォーラム(札幌市、2018.11.20-22).
 - 佐久間 俊・Golan Guy・Guo Zifeng・小川泰一・田切明美・杉本和彦・大西志全・神野裕信・山下陽子・Peleg Zvi・Schnurbusch Thorsten・小松田隆夫. コムギの稔実小花数増加による多収化. 育種学研究 21(別1):114(2019.3).
 - 粕谷雅志・足利奈奈・池田達也・大西志全. 北海道の硬質小麦品種におけるGlu/Gli比. グルテン研究会(厚木市、2018.5.12-13).
 - 足利奈奈・山下陽子・大西志全・神野裕信. 日長反応性遺伝子Ppd-D1が北海道の春まき小麦の農業特性に及ぼす影響. 日本育種学会第134回講演会(岡山市、2018.9.22-23).
 - 其田達也. 発芽を伴わない低アミロの要因. 第22回穂発芽研究会(札幌市、2019.1.17-18).
 - 林 和希・足利奈奈・大西志全. 2018年北海道春まき小麦の作柄とオホーツク地域における穂発芽被害の状況. 第22回穂発芽研究会(札幌市、2019.1.17-18).
 - 丸田泰史・林 和希・山下陽子・大西志全. 北海道の秋まき小麦におけるイギリス品種由来の多収・大粒QTLの効果. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 59:32-33(2018.12).
 - 鈴木千賀・品田博史・山下陽子・東岱孝司・串田篤彦. PekingおよびPI90763由来のダイズシストセンチュウレース5抵抗性について. 日本育種学会134回講演会(岡山県、2018.9.22-23).
 - 山下陽子・品田博史. 道総研における馬鈴しょDNAマーカー開発と育種. 2018年度次世代バレイショセミナー(幕別町、2018.11.10-11).
 - 足利和紀. チモシーのハルギャとのアレロパシーに関する遺伝率. 北海道畜産草地学会報 7:128(2019.9).
 - 足利和紀・田中常喜・藤井弘毅. チモシーにおける栄養価の早期選抜法. 2019年度日本草地学会広島大会(東広島市、2019.3.25-27).
 - 中辻敏朗. 土壌の生産力を持続可能にしよう -The Soils of Japan- 北海道における持続可能な土壌管理. 日本土壌肥料学会講演要旨集 64:170(2018).
 - 中辻敏朗・小野寺鶴将. 土壌凍結深制御による野良イモ低減効果 -オホーツク海沿岸部における実証-. 日本土壌肥料学会北海道支部秋季大会.(旭川市、2018.11.29).
 - 石倉 究・須田達也・杉川陽一・唐 星児・笛木伸彦. 携帯型NDVIセンサを用いた秋まき小麦の止葉期窒素吸収量の推定. 日本土壌肥料学会講演要旨集 64:130(2018).
 - 藤本岳人・大木健広・中山尊登・眞岡哲夫・青野桂之・安岡眞二. Dickeya chrysanthemiによるジャガイモ黒あし病の発生(病原追加). 平成31年度日本植物病理学会大会(つくば市、2019.3.18-20).
 - 黒田大飛・岩館健司・鈴木育男・渡辺美知子・池田幸子. ジャガイモ疫病初発時期予測システム(F LABS)の改良. 情報処理北海道シンポジウム2018(北見市、2018.10.6).
 - 田中静幸・杉山 裕. 北海道東部で栽培されたタマネギ短日性品種の諸特性. 北海道園芸研究談話会(札幌市、2018.12.2).
 - 小林 聡・鴻坂扶美子・鈴木千賀・山口直矢・藤田正平・品田博史・三好智明・萩原誠司・黒崎英樹・青山 聡・奥山昌隆・山下陽子・中道浩司・竹内 薫・川原美香. ショ糖含量が高く豆腐加工適性に優れる大豆新品種「十育258号」の育成. 日本育種学会134回講演会(岡山県、2018.9.22-23).
 - 池谷 聡. 直播栽培と移植栽培によるテンサイの生育および収量反応の品種間差. てん菜研究会第16回技術研究発表会(札幌市、2018.7.18)

3) 専門雑誌記事

- 林 和希. 平成30年度北海道産小麦流通実態調査報告. 北海道米麦改良139号:21-22 (2019. 1. 30)
- 大波正寿. ポテトチップ用馬鈴しょ新品種「北育22号」の特性. 農家の友8月号: 46-47(2018).
- 大波正寿. 馬鈴しょ「ハロームーン」(北育22号) センチュウ抵抗性強のポテトチップ用新品種. ニューカントリー10月号: 48-49(2018).
- 大波正寿. ジャガイモ ハロームーン (ポテトチップス用) 一線虫・そうか病・塊茎腐敗病に強く、チップカラーが優れる新品種。いも類振興情報 138: 11-14(2019).
- 藤井弘毅・飯田憲司・足利和紀. チモシー新品種「北見33号」. 北農85(2): 30-31(2018).
- 足利和紀・藤井弘毅・飯田憲司. とうもろこし(サイレージ用)新品種「コロサリス(HK1416)」. 北農85(2): 32-33(2018).
- 足利和紀. サイレージ用とうもろこし「コロサリス(HK1416)」の特性. デーリィマン6月号: 42(2018).
- 奥村 理. 育苗土のリン酸増やし、圃場施肥量を半分に. ニューカントリー7月号: 14-15(2018).
- 唐 星児. 道東「きたほなみ」で全量基肥確立 肥効調節型を活用して秋まき小麦の追肥省略. ニューカントリー8月号: 48-49(2018).
- 安岡眞二. 種いも栽培におけるジャガイモ黒あし病の保菌リスクと対応の考え方. ニューカントリー11月号: 20-23(2018).
- 安岡眞二. ジャガイモ黒あし病の各生産工程における種いも保菌リスクと対応の考え方. グリーンテクノ情報 14(3): 7-10(2018).
- 谷藤 健・笛木伸彦・安岡眞二・三宅規文・小野寺鶴将・清水基滋・白旗雅樹. 有機栽培畑輪作における地力推移・作物収量・病害虫発生の特徴と雑草抑制対策. 北農 85(3): 232-240(2018).
- 池谷美奈子. 1年1組てん菜の時間. ニューカントリー7月号: 62-63(2018).
- 池谷 聡. 「てん菜の時間 連載10 品種の特性」. ニューカントリー11月号: 98-99(2018).
- 池谷 聡. 平成30年産てん菜の生産実績とその要因について. てん菜協会だより 131: (2019. 1).

4) 著編書、資料

- 大西志全. 平成30年度小麦作柄調査の概要について. 北海道米麦改良協会ホームページ掲載 (2018. 7. 9)
- 大西志全. 北海道の小麦づくり II 小麦品種の特性と栽培上の留意点. 平成30年度「北海道の小麦づくり」 51-66 (2018. 2).
- 唐 星児. 北海道の小麦づくり III 良質小麦生産のための施肥および土壌管理. 平成31年北海道米麦改良協会講習会資料 67-96(2019).
- 田中静幸. 農業技術体系 たまねぎ早期播種作型. 農文協 (2018).
- 田中静幸(分担執筆). タマネギ大事典 春まき秋どり栽培(早期播種). 農文協 147-156(2019).
- 池谷 聡. 道内主要農作物 「てんさい」について. ニューカントリー2018年夏期臨時増刊号. (株)北海道協同組合通信社 (2018).
- 杉山 裕. 道内主要農産物9 たまねぎ. ニューカントリー2018年夏季臨時増刊号. (株)北海道協同組合通信社 76-77(2018).

5) 新聞記事

- 大波正寿. そうか病と塊茎腐敗に強くシストセンチュウ抵抗性 加工用ばれいしょ品種「ハロームーン」. 日本農業共済新聞 (2018. 11. 7).
- 足利和紀. とうもろこし(サイレージ用)新品種「コロサリス(HK1416)」. 日本農業共済新聞 (2018. 11. 21).
- 安岡眞二. 種馬鈴しょ生産における黒あし病のリスク低減対策. 日本農業新聞 (2019. 2. 27).
- 池谷美奈子. たまねぎ小菌核病 効率的な防除対策. 日本農業共済新聞 (2018. 7. 11).
- 池田幸子. 秋まき小麦の雪腐病対策のポイント. 日本農業新聞 (2018. 10. 18).

2 普及事項

1) 普及奨励事項

- (1) ばれいしょ新品種「北育24号(品種名未定)」
- (2) いんげんまめ新品種「十育B84号(品種名未定)」
- (3) とうもろこし(サイレージ用)「TH1475」
- (4) とうもろこし(サイレージ用)「KD421(KE5340)」
- (5) シロクローバ新品種「Aberlasting」

2) 普及推進事項

3) 指導参考事項

- (1) オホーツク(北見内陸)および根釧地域における牧草播種機を利用した夏播種条件下でのチモシー主体草地安定造成のための播種量
- (2) 飼料用とうもろこしに対する加里質肥料「塩化加里」の施用効果
- (3) たまねぎに対する液状複合肥料「アヅ・リキッド413」の施用効果
- (4) 道東地域における小豆早生品種の密植・適期播種による安定栽培法
- (5) 除草剤
 - ①大豆に対する除草剤「NC-622液剤(ラウンドアップマックスロード)」の実用化(耕起または播種前、極少水量散布)
 - ②ばれいしょに対する除草剤「KUH-043顆粒水和剤」の実用化
- (6) 殺虫・殺菌剤
 - ①たまねぎの白斑葉枯病に対するイソフェタミド水和剤Fの効果
 - ②たまねぎの白斑葉枯病に対するマンデストロピン水和剤F(未登録、15日間隔散布)の効果
 - ③たまねぎの小菌核病に対するイソピルフルキサム水和剤F(未登録)の効果
 - ④たまねぎの小菌核病に対するテブコナゾール・マンゼブ水和剤F(未登録)の効果
 - ⑤たまねぎの小菌核病に対するペンチオピラド・TPN水和剤F(未登録)の効果

4) 研究参考事項

- (1) 近赤外分光法による小麦粉吸水率の簡易・迅速評価
- (2) 菓子加工適性評価のためのスポンジケーキのテクスチャー測定法

3 品種登録・特許申請

○小麦「北見92号」、神野裕信、粕谷雅志、大西志全、其田達也、足利奈奈、森田耕一、吉村康弘、山名三佳子、小林聡、西村努、池永充伸、来嶋正朋、中道浩司、樋浦里志、井上哲也、鈴木孝子、相馬ちひろ、小倉玲奈、浅山聡、木口忠彦、池田幸子、栢森美如、菅原彰、田縁勝洋、出願日-2018/2/22、出願番号-32876、出願公表日-2018/5/24

○ばれいしょ「コナユタカ」、大波正寿、藤田涼平、中山輝、萩原誠司、江部成彦、池谷聡、千田圭一、田中静幸、入谷正樹、伊藤武、竹内徹、出願日-2014/6-25、出願番号-29309、出願公表日-2014/10/28、登録年月日-2019/2/12、登録番号-27260

○ばれいしょ「ハロームーン」、大波正寿、松永浩、青山聡、品田博史、中山輝、藤田涼平、萩原誠司、江部成彦、池谷聡、千田圭一、田中静幸、入谷正樹、堀田治邦、相馬ちひろ、古川勝弘、白井佳代、佐々木純、出願日-2018/4/16、出願番号-33032、出願公表日-2018/8/14

○大豆「とよまどか」、鴻坂扶美子、藤田正平、三好智明、鈴木千賀、小林聡、山口直也、萩原誠司、黒崎秀樹、品田博史、青山聡、奥山昌隆、山下陽子、中道浩司、出願日-2018/6/21、出願番号-33213、出願公表日-2018/10/25

V 研究企画・場運営・広報活動

1 諸会議

会 議 名	開催時期	場 所	参 加 者
定例庁内会議	H30. 4. 20	農試会議室	場員
定例庁内会議	H30. 5. 16	農試会議室	場員
定例庁内会議	H30. 6. 12	農試会議室	場員
定例庁内会議	H30. 7. 3	農試会議室	場員
新規課題場内検討会議	H30. 6. 26	農試講堂	場員
定例庁内会議	H30. 8. 1	農試会議室	場員
定例庁内会議	H30. 9. 3	農試会議室	場員
定例庁内会議	H30.10. 3	農試会議室	場員
定例庁内会議	H30.11. 7	農試会議室	場員
現地委託試験成績検討会	H30.12. 3	JAきたみらい訓子 府地区事務所 3階大会議室	場員、普及センター、関係 農試、関係農業団体等
定例庁内会議	H30.12. 6	農試会議室	場員
成績会議場内検討会	H30.12.12	農試講堂	場員
定例庁内会議	H31. 1. 11	農試会議室	場員
イノベーション創出強化研 究推進事業「北海道に適応 した障害や病害に強く加工 適性に優れた小麦品種の開 発」(26097C)最終年度末推 進会議	H31. 1.28	かでの2・7 730研 修室	コンソーシアムメンバー 27名
定例庁内会議	H31. 2. 7	農試会議室	場員
設計会議場内検討会	H31. 2. 4,5	農試講堂	場員
定例庁内会議	H31. 3.15	農試会議室	場員
現地委託試験設計検討会	H31. 3.26	農試講堂	場員、普及センター、関係 農試、関係農業団体等

2 各種委員会

1) ほ場管理・施設等整備委員会

(1) 構成

委員長：江部成彦

事務局長：神野裕信(ほ場管理)、山本雅彦(施設等整備)

委員：松島英明、伊藤幸雄、大西志全、大波正寿、佐藤公一、奥村 理、安岡眞二、
萩原誠司、小倉玲奈

(2) 活動内容

① 委員会の開催

第1回：平成30年5月14日

- 1) 平成31年度施設等整備要望について
- 2) 防風林整備計画について
- 3) 作物温室舗装工事に伴う残土集積箇所について

第2回：平成30年6月15日

- 1) 当面の防疫体制について
- 2) 施設修繕・改修工事予定について

第3回：平成31年1月16日

- 1) 平成31年度試験研究用備品の予算要望について
- 2) 平成32年度施設整備の予算要望について
- 3) 平成31年度防風林整備計画について
- 4) 病虫害汚染防止マニュアルの改訂について

2) 業務委員会

(1) 構成

委員長：神野裕信

委員：伊藤幸雄、其田達也、品田博史、飯田憲司、唐 星児、池田幸子、杉山 裕

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成30年4月10日

- 1) 業務委員会開催要領
- 2) 麦類G(管理)業務体制
- 3) 室外契約職員体制
- 4) 月間作業予定
- 5) 週間作業予定
- 6) 作付計画
- 7) 4月下旬の作業予定

② 定例委員会：4月26日から10月25日まで原則として毎週木曜日に開催した。

- 1) 機械作業など週間作業計画および貨物車両使用計画
- 2) 室外契約職員週間作業計画

③ 臨時委員会：平成30年12月20日

- 1) 平成30年度の反省点、平成31年度の雇用数

④ 臨時委員会：平成31年3月11日

- 1) 室外契約職員の応募状況、雇用数、面接方法

3) 図書・広報委員会

(1) 構成

委員長：中辻敏朗

委員：立山裕之、林 和希、足利和紀、木場稔信(図書連絡委員兼務)、小倉玲奈

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成30年4月19日

- 1) 図書連絡委員の選任
- 2) 今年度業務内容の確認
- 3) その他(オンラインジャーナルの購読、資料保管庫の利用、道総研OPACの運用開始)

② 第2回委員会：平成30年10月24日

- 1) 平成31年度定期刊行物購入計画の策定

③ 新着図書の案内、刊行物の配布、蔵書調査に対する回答等は随時実施

4) システム委員会

(1) 構成

委員長：中辻敏朗

委員：木村祐介、林 和希、松永 浩、池田幸子(システム管理者兼務)、池谷 聡

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成30年4月19日

- 1) システム管理者の選任
- 2) 業務分担の確定
- 3) 北見農試ホームページ更新操作マニュアルについて
- 4) 北見農試ホームページ更新操作講習会の開催について
- 5) 場内LANDISK管理について

② 北見農試ホームページ編集操作手順講習会：平成30年6月14日

講師：池田委員、参加者13名

以下の次第により、WEBページの基本的なメンテナンスを講義と実習を通じて学んだ。

- 1) 基本のWEB HTML入門1 WEBの特徴
- 2) 基本のWEB HTML入門2 HTML講座
- 3) 基本のWEB HTML入門3 書いてみよう、HTML (実習)
- 4) 北見農試HP各研究室ページの問題点と修正方法
- 5) 道総研HP作成システムNORENの使い方

③ ホームページの更新：14回

5) バイテク共同実験室利用委員会

(1) 構成

委員長：田中静幸

委員：杉本義則、足利奈奈、足利和紀、池谷美奈子、田中静幸(兼任)

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成30年4月12日

- 1) 本年度の委員
- 2) 平成29年度報告
- 3) フロンガス点検(6, 9, 12, 3月)
- 4) 施設整備要望
- 5) その他

6) 定期作況報告委員会

(1) 構成

委員長：江部成彦

事務局長：荒木和哉

気象担当：中辻敏朗

とりまとめ：飯田憲司

委員：其田達也、足利奈奈、青山 聡、池谷 聡、萩原誠司、飯田憲司、
足利和紀、杉山 裕

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成30年4月18日

- 1) 平成30年度定期作況報告の実施体制
- 2) 定期作況調査報告実施要領

- 3)平成30年度年間日程
- 4)平成30年度の具体的作業日程と該当作物
- 5)最終作況の判定基準について

7) 公開デー実行委員会

(1) 構成

委員長：江部成彦

事務局：山本雅彦、中辻敏朗

委員：中出秀信、粕谷雅志、大波正寿、足利和紀、木場稔信、小野寺鶴将、萩原誠司、
小倉玲奈、佐々木康洋

(2) 活動内容

- ① 第1回委員会：平成30年4月26日
 - 1)実施方針について
 - 2)イベント内容と班編制およびリーダーについて
 - 3)試食・クイズラリー景品用の馬鈴しょ作付について
 - 4)今後の進め方について
- ② 第2回委員会：平成30年5月24日
 - 1)各イベントへの職員配置について
 - 2)イベント企画案について(たたき台の提示)
 - 3)物品購入，契約職員の必要人数，机・椅子の必要数について
- ③ 第3回委員会：平成30年6月27日
 - 1)イベント準備の進捗状況報告
 - 2)購入物品のとりまとめ結果について
 - 3)ポスター案の検討
 - 4)今後の作業スケジュールについて
- ④ 第4回実行委員会：平成30年8月1日
 - 1)イベント準備の進捗状況最終報告
 - 2)前日から当日の流れについて
 - 3)当日の配布チラシについて
- ⑤ 第5回実行委員会：平成30年10月23日
 - 1)開催結果の概要報告
 - 2)来場者アンケート集計結果の報告
 - 3)公開デーに係る場員からの意見・反省点・改善方向への対応について
 - 4)来年度の開催日について(後日の庁内会議での承認により平成31年8月8日に決定)
 - 5)各イベント実施手順等の引き継ぎについて

8) オホーツク圏農業新技術セミナー実行委員会

(1) 構成

委員長：田中静幸

事務局：山本雅彦、神野裕信、荒木和哉、中辻敏朗

実行委員：森田耕一、青山 聡、飯田憲司、奥村 理、池谷美奈子、小倉玲奈

(2) 活動内容

- ①第1回実行委員会：平成30年4月12日
 - 1)過年度報告

- 2) 今年度開催案
- ②第2回実行委員会：平成31年1月8日
 - 1) 準備経過確認(庁内会議報告9/3, 12/6)
 - 2) 口頭発表課題の確認およびパネル展示 候補課題の選定(案)
 - 3) 開催案内チラシの作成について
 - 4) 要旨原稿集約・編集担当の選定
 - 5) パネル集約担当の選定
 - 6) 口頭発表データ集約・編集担当の選定
 - 7) 広報および場内対応について確認
 - 8) その他準備
- ③北見市端野町公民館との打ち合わせ
 - 1) 平成30年10月15日 会場仮予約
 - 2) 平成30年11月26日 会場本予約
 - 3) 平成31年2月12日 進行打合せ
出席者：田中静幸、小倉玲奈
会場設備、当日進行等の確認
- ④口頭発表リハーサル：平成31年2月14, 15日
口頭発表担当者：松永 浩、萩原誠司、足利和紀、唐 星児、飯田憲司、小倉玲奈、奥村 理、池田幸子、斉藤克史(網走農業改良普及センター)
- ⑤セミナー開催：平成31年2月26日、13:00開会、16:00閉会
- ⑥第3回実行委員会：平成31年3月19日
 - 1) 来場者アンケート結果
 - 2) 場員アンケート結果
 - 3) 次年度開催案

9) その他委員会

- (1) 公宅入居委員会：平成31年3月13日
 - ① 出席者 山本雅彦（場長指定）、神野裕信（支部長）、佐藤公一（書記長）、安岡眞二（弥生町内会）、中出秀信（若葉町内会代理）、木村祐介（事務局）
 - ② 活動内容
平成31年4月1日付け人事異動による公宅入居希望者の決定、公宅管理を行っているオホーツク総合振興局総務課へ報告

3 刊行印刷物

印刷物名	発行年月	頁	部数
飼料用とうもろこしに対する加里質肥料「塩化加里」の施用効果	31. 1	37	50
平成30年度「オホーツク農業技術セミナー」発言要旨集	31. 2	30	250

4 広報活動

1) シンポジウム・セミナー等

名 称	開催日	場 所	内 容	参加者
オホーツク・スマート農業セミナー2018 【酪農・畜産部門】	H30. 11. 7	湧別町文化センターTOM	6課題の口頭と2団体の展示が行われた。	150名
オホーツク・スマート農業セミナー2018 【畑作部門】	H31. 1. 17	北見市民会館	9課題の口頭と9団体の展示が行われた。	350名
オホーツク農業新技術セミナー	H31. 2. 26	北見市端野町公民館	講演9題、パネル展示12枚の展示が行われた。	173名

2) マスコミ、広報誌等による報道

タ イ ト ル	報 道 機 関	掲載・放送日
除草剤抵抗性てんさい紹介	NHK札幌放送局	H30. 5. 22
カット用野菜新顔続々(業務用たまねぎ「すらりっぷ」紹介)	日経MJ	H30. 8. 6
オホーツクラボ探訪 菓子用小麦の開発大詰め	北海道新聞北見地方版	H31. 2. 28

3) 展示会等への出展、公開デー

(1) 北海道小麦キャンプ2018inオホーツク

日時：平成30年7月10～11日

場所：北見農試場内、北見市生産者圃場ほか

主催：北海道小麦キャンプ2018inオホーツク実行委員会

北見農試来場者：約80名

行事内容：小麦育種に関する講義、農試圃場の視察。

(2) 北見農試公開デー2018

日時：平成30年8月9日 9時30分～13時(受付は12時30分まで)

場所：場内

天候：雨(最高気温20.4℃)

来場者：111名(うち小学生以下20名)

行事内容：クイズラリー(会場内7か所に各研究室出題のクイズ設置)、研究成果展示(新品種、栽培技術などのパネル展示、作物の展示)、畑作園芸相談コーナー(栽培法、肥料、病気、害虫などの技術相談、資料展示)、ほ場見学バスツアー(車中から見学、3回運行)、畑で働く農業機械展(5機種を展示)、試食コーナー(バターロール、ポテトチップ、ふかしいも、冷やし汁粉を提供)、おもしろ体験コーナー(植物アート、小麦粘土)、網走水試コーナー(研究成果展示、プランクトン観察、焼ホタテ試食→雨のため活ホタテを抽選で配布)、地場産野菜、地元産品等の販売(ファーマーズマーケット「夢ミール」、株式会社ツムラ)

(3) Matching HUB Sapporo 2018

日時：平成30年9月20日

場所：札幌パークホテル

主催：国立大学法人小樽商科大学

来場者：300名

出展内容：加工向けたまねぎ品種「ゆめせんか」、「すらりっぶ」ポスター展示，資料配付

(4) 第33回ビジネスEXPO

日時：平成30年11月8～9日

場所：アクセスサッポロ

主催：北海道技術・ビジネス交流会実行委員会(北海道ほか)

来場者：21,200名

出展内容：加工向けたまねぎ品種「ゆめせんか」、「すらりっぶ」ポスター展示，資料配付

(5) 2018アグリビジネス創出フェア in Hokkaido

日時：平成30年11月16～17日

場所：サッポロファクトリー

主催：農林水産省農林水産技術会議事務局、NPO法人グリーンテクノバンク

来場者：1,400名

出展内容：加工向けたまねぎ品種「ゆめせんか」、「すらりっぶ」ポスター展示，資料、サンプル配付

5 見学受入れ

年月日	団 体 名	人 数
H30. 5. 30-6. 1	訓子府高等学校インターンシップ研修	2人
H30. 6. 15	網走農業改良普及センター	12人
H30. 6. 7	上富良野町集落営農協議会_江花中山間活動組織	15人
H30. 6. 14	JA全農耕種総合対策部	2人
H30. 6. 20	女満別採種小麦生産組合	22人
H30. 6. 21	網走農業改良普及センター	17人
H30. 6. 21	住友化学、JA岩見沢	11人
H30. 7. 5	JA美瑛 種馬鈴しょ生産者団体	22人
H30. 7. 6	佐呂間町麦耕作生産協議会	3～5人
H30. 7. 6	本別農協麦類種子生産部会	11人
H30. 7. 11	小麦キャンプ2018 in オホーツク実行委員会	70人
H30. 7. 13	美唄市農協	29人
H30. 7. 17	JA営農指導員技術研修	
H30. 7. 24	JAさっぽろ玉ねぎ部会	10人
H30. 8. 1	日本甜菜製糖株式会社美幌製糖所	17人
H30. 8. 3	和寒町農業委員会	14人
H30. 8. 20	美唄市農業委員会	20人
H30. 8. 21	ホクレン各支所生産資材課主任技師ら	15人
H30. 8. 23	馬鈴しょ協議会	7人
H30. 9. 10	居武士小学校	8人
H30. 10. 1	昭和産業株式会社	6人
H30. 10. 12	日本製粉株式会社	2人
H30. 10. 15	千葉製粉株式会社	5人
H30. 10. 23	日東富士製粉株式会社、株式会社増田製粉	7人

VI 技術指導および研修

1 研修生の受入れ

研修項目	団体・人数	研修期間	対応グループ
インターンシップ研修	北海道訓子府高等学校(2名)	H30. 5. 30 ～6. 1	総務課 麦類G 作物育種G 生産環境G 地域技術G
平成30年度普及指導員研修 (高度専門技術研修・(畑作)) 前期	上川農業改良普及センター大雪支所(1名) 十勝農業改良普及センター北部支所(1名) 網走農業改良普及センター清里支所(1名)	H30. 6. 4 ～6. 6	麦類G 作物育種G 生産環境G 地域技術G 技術普及室
平成30年度普及指導員研修 (高度専門技術研修・(植物保 護))前期	網走農業改良普及センター本所(1名) 北海道農業大学校(1名)	H30. 6. 11 ～6. 15	生産環境G 技術普及室

2 講師派遣

研修会および講習会	主催者	開催日	演題	派遣者
北見施肥防除合理化推進連 絡協議会_防除技術講演会	北見施肥防除合理 化推進連絡協議会、 ホクレン北見支所	H30. 4. 17	たまねぎの小菌核病に対する 効率的防除対策 肥効調節型肥料を用いた秋ま き小麦の全量基肥施用法 野良イモ退治だけじゃない！ 土を凍らせて畑の生産力アッ プ	池谷美奈子 唐 星児 中辻敏朗
オホーツクJA営農指導員技 術研修	JA北海道中央会北 見支所	H30. 7. 17	土壌pHの測定法農薬・病害虫 防除の基礎知識	唐 星児 木俣 栄
平成30年度地域課題解決研 修	オホーツク総合振 興局農務課、網走 農業改良普及セン ター	H30. 8. 1	バイオガス消化液の肥料効果 と作物に与える影響について	木場稔信
オホーツクJA営農指導員技 術研修	JA北海道中央会北 見支所	H30. 9. 28	GPS・GISの基礎知識	山岸修一
オホーツク豆フェスタ	公益財団法人オホ ーツク地域振興機 構	H30. 11. 2	農業試験場の豆に関する取組 み	江部成彦
斜里町指導農業士・農業士 会JA斜里町青年部合同学習 会	JA斜里町	H30. 12. 21	秋まき小麦における葉枯症の 防除対策について	池田幸子
平成31年 豆作り講習会	公益財団法人日本 豆類協会	H30. 1. 30	大豆「とよまどか」について	萩原誠司
玉葱生産流通懇談会	北見地区玉葱振興 会	H31. 2. 5	平成30年産たまねぎの生育概 況とこれからのたまねぎ研究 の動向	田中静幸

研修会および講習会	主催者	開催日	演題	派遣者
高品質てん菜作り講習会	北海道てん菜協会	H31. 2. 6	温暖化は北海道のてんさいや他の畑作物にどう影響するか ー2030年代の予測ー	中辻敏朗
平成30年度第2回地域情報交換会	独立行政法人農畜産業振興機構	H31. 2. 8	ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の特性について	青山 聡
株式会社丸米産商耕作者講習会	株式会社丸米産商	H31. 2. 13	野良イモ退治だけじゃない、土を凍らせて畑の生産力アップ	中辻敏朗
北海道農薬卸協同組合研修会	北海道農薬卸協同組合	H31. 2. 21	気候変動予測に基づく将来の北海道農業ー2030年代の予測と対応方向ー	中辻敏朗
平成30年度良質米麦生産技術講習会(オホーツク)	北海道米麦改良協会	H31. 2. 22	今年の病害虫対策について	木俣 栄
豆・麦類種子栽培技術研修会	十勝農協連	H31. 3. 1	小麦の収量・品質の変動と品種改良について	大西志全

3 職員研修

氏名	研修項目	場所	期間
八谷絃一	刈払い機取扱作業安全衛生教育	(株)技術能力開発センター 北見教習所	H30. 4. 20
山本雅彦	新任主幹級研修	第2水産ビル	H30. 4. 23～H30. 4. 24
松島英明	会計制度研修	道総研プラザ	H30. 4. 26
木村祐介	〃	〃	〃
江部成彦	新任研究部長級研修	〃	H30. 5. 9～H30. 5. 10
松島英明	新任総務担当者等研修	北海道庁	H30. 5. 17
神野裕信	新任研究主幹級研修	道総研プラザ	H30. 5. 31～H30. 6. 1
伊藤幸雄	自動車用タイヤ空気充填の業務に係る特別教育	キャタピラー教習所北海道講習センター	H30. 6. 18～H30. 6. 19
井口岳人	〃	〃	〃
木村祐介	新任総務担当者等研修	北海道庁	H30. 7. 6
井口岳人	ローラーの運転業務に係る特別教育	北見農試	H30. 7. 7
中出秀信	〃	〃	〃
檜村 優	〃	〃	〃
伊藤幸雄	振動工具取扱作業安全衛生教育	(株)技術能力開発センター 北見教習所	H30. 8. 4
井口岳人	〃	〃	〃
中出秀信	〃	〃	〃
檜村 優	〃	〃	〃
田中正紀	〃	〃	〃

氏名	研修項目	場所	期間
神野裕信	農業研究本部新任研究主幹研修	道総研プラザ	H30. 8. 20～H30. 8. 21
林 和希	採用3年目職員研修	十勝農試	H30. 8. 28～H30. 8. 29
中出秀信	〃	〃	〃
大西志全	新任主査級研修	道総研プラザ	H30. 9. 12～H30. 9. 13
山本雅彦	安全運転管理者講習	北見市民会館	H30. 10. 11～H30. 10. 12
山本雅彦	防火管理甲種新規講習	端野町公民館	H30. 10. 18
森田耕一	新規採用研究職員研修	R&Bパーク札幌大通サテライト (HiNT) セミナースペース	H30. 11. 1～H30. 11. 2
佐々木太陽	〃	〃	〃
其田達也	新任研究主任研修	道総研プラザ	H30. 11. 14～H30. 11. 15
山本雅彦	不当要求防止責任者講習	北見芸術文化ホール	H31. 2. 27
松島英明	電気安全講習会	オホーツク木のプラザ	〃
木村祐介	〃	〃	〃

4 職場研修

研修会および講習会	講師	開催日
ハラスメントについて	総務課長 山本雅彦	H30. 5. 29
病虫害汚染防止	場 長 清水基滋	〃
農作業安全	研究主幹 神野裕信	〃
契約職員に対する作業指示	研究部長 江部成彦	〃
平成30年度防火訓練	訓子府消防署	H30. 10. 15

5 国際交流

交流事業名	派遣内容	派遣職員	期間
該当無し			

Ⅶ その他

1 技術体系化チーム

技術体系化チームとしての取り組みはなかった。

2 オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチーム（技術普及室・研究部）

プロジェクト課題2課題について、オホーツク地域農業支援会議プロジェクトチームで取り組んだ。

1つ目は「輪作体系再構築に向けた検討」で、実態の把握が必要であり、輪作体系や連作・交互作の実態把握のため、地図システムを活用した輪作実態の「見える化」等に取り組んだ。

2つ目は「ICTを活用した省力化機械の導入効果等の検証」で、近年補助事業等を活用して導入が加速化している搾乳ロボットについて、導入効果等の検証を行うため、導入事例調査を行った。

なお、オホーツク地域農業支援会議関係者会議で、取り組み内容について報告した。

3 表彰・受賞

該当なし

4 行事

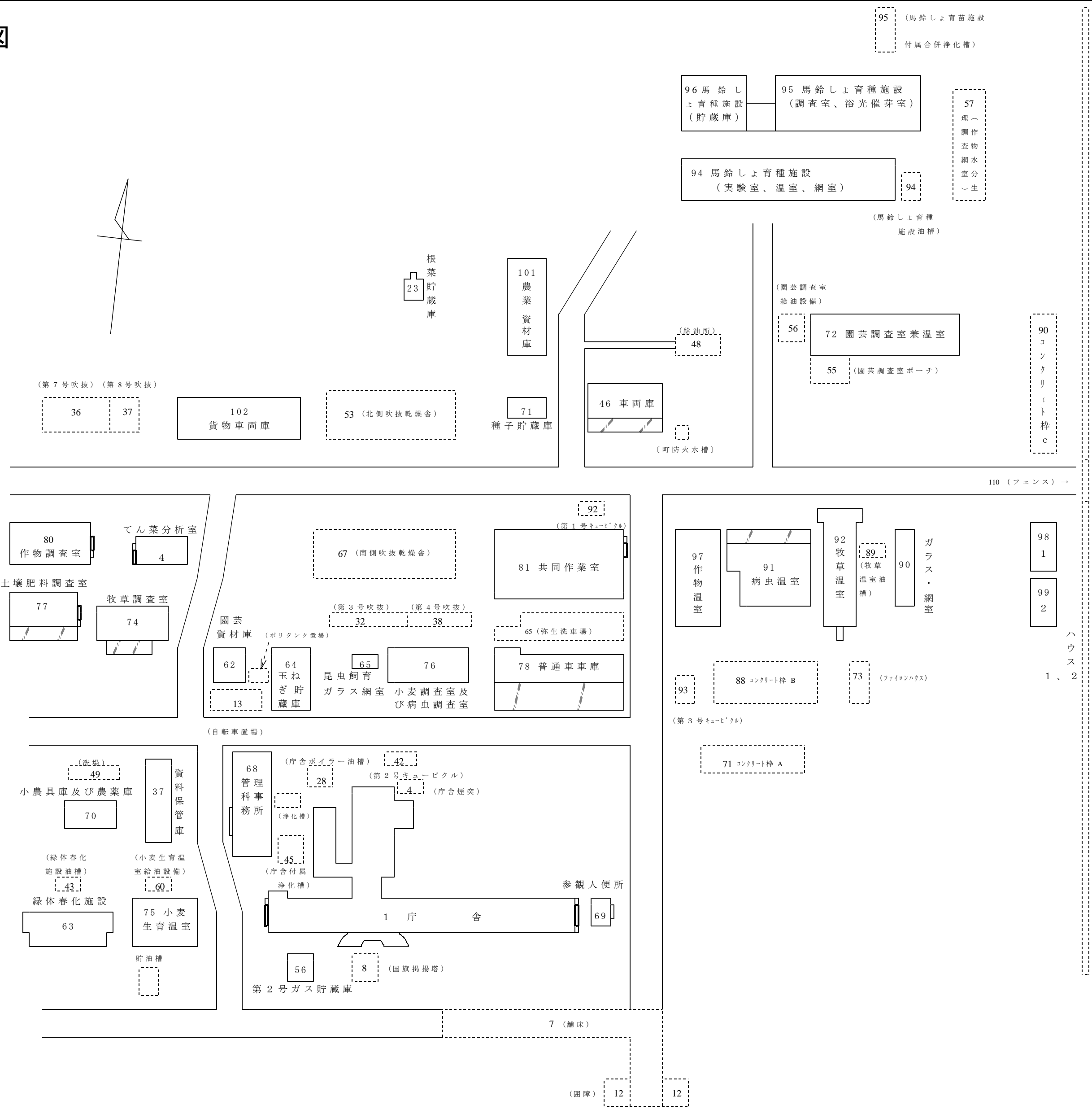
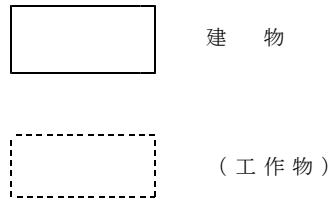
月 日	行 事 名	月 日	行 事 名
4月 2日	辞令交付式(新規採用)	12月 3日	オホーツク現地試験成績検討会
12日	本部長・場長会議	12日	場内成績検討会議
19日	オホーツク鳥インフル警戒本部幹事会	18日	農研本部場長会議
26日	北見工業大学社会連携推進センター推進協議会	1月 17日	オホーツク・スマート農業セミナー2018 【畑作部門】
5月 1日	農研本部場長会議	21-25日	北海道農業試験会議成績会議
16-17日	オホーツク総合振興局施策推進会議	24日	農研本部場長会議
22日	研究部長会議	2月 1日	オホーツク地域農業技術支援会議・5者会議
29日	職場研修(ほ場汚染防止・労働安全等)	4-5日	場内設計会議
6月 8日	農研本部場長会議	7日	訓子府町チャレンジアッププロジェクト
8日	北海道農業技術推進委員会	15日	JAきたみらい気象変動に負けない農業確立プロジェクト
15日	場内見学案内リハーサル	20日	NATEC定期総会・研究交流会
19日	訓子府町地域活性化チャレンジ事業選考委員会	21日	農業新技術発表会(全道版)
26日	場内新規課題検討会議	22日	設計会議 てん菜分科会
28日	JAきたみらい気象変動に負けない農業確立プロジェクト	26日	オホーツク農業新技術セミナー
7月5-6日	新規課題検討会議(畜産部会)	3月 1日	オホーツク地域農業支援会議・地域関係者会議
10-13日	新規課題検討会議	1日	オホーツク地域農業気象連絡協議会
20日	訓子府町チャレンジアッププロジェクト	4-8日	北海道農業試験会議設計会議
24日	ほ場利用現況確認	11日	研究本部長・場長会議
8月 9日	北見農業試験場公開デー	13日	北海道農業試験研究推進会議
27日	オホーツク地域農業気象連絡協議会	14日	農研本部場長会議
30日	JAきたみらい気象変動に負けない農業確立プロジェクト	14日	JAきたみらいプロジェクト活動報告会
31日	設計会議 秋まき小麦分科会	26日	オホーツク現地託試験設計検討会
9月 26日	農研本部場長会議	29日	辞令交付式・発令通知式(退職・異動)
10月 11日	研究本部長・場長会議		
15日	防火訓練		
24日	オホーツク鳥インフル警戒本部幹事会		
30日	北見工大社会連携推進員・協力員合同会議		
30日	オホーツク鳥インフル防疫訓練		
11月 8日	農研本部場長会議		
8日	オホーツク・スマート農業セミナー2018 【酪農・畜産部門】		
20日	道産小麦品質向上プロジェクト成績検討会		
21日	馬鈴しょ輸入品種選定等受託試験及び育成系統連絡試験成績検討会		
22日	てん菜輸入品種検定試験及び育成系統連絡試験成績検討会		

5 自己点検への対応

事 項	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
研究成果発表会の開催件数	1	1	2	0	2	1	1	3
研究成果発表会への延べ参加人数	234	189	247	0	496	169	136	673
研究会等の開催件数	2	2	4	0	0	1	1	1
研究会等への延べ参加人数	338	319	650	0	0	39	97	60
発表会・展示会等への出展件数	4	8	1	0	2	1	2	3
研究報告書の発行状況	—	7	6	4	4	2	4	—
技術資料の発行状況	—	2	1	1	1	4	1	—
学会やシンポジウム等での発表件数	28	39	47	24	36	33	20	25
学術誌や専門誌への投稿論文数	14	13	18	17	10	16	11	9
普及組織との連絡会議等開催件数	0	12	40	59	9	9	10	5
技術相談件数	58	70	88	43	66	85	89	85
技術指導件数	214	178	175	148	78	56	55	53
研究成果の公表・活用状況(雑誌)	—	26	32	16	15	31	30	17
研究成果の公表・活用状況(書籍)	—	11	1	6	1	2	2	1
研究成果の公表・活用状況(新聞)	—	6	4	8	2	7	3	5
技術審査件数	1	1	2	1	1	1	0	1
依頼試験実施件数	0	0	0	0	0	0	0	0
試験機器等の設備の提供件数	9	0	0	0	0	0	0	0
利用者意見把握調査の回答数	135	116	182	48	94	180	115	145
研修会・講習会等の開催件数	1	0	2	14	0	2	2	3
研修会・講習会等の延べ参加者数	7	0	11+?	1,200	0	520	308	40
研修者の延べ受入人数	4	5	16	10	2	0	0	28
特許等の出願件数	1	2	1	0	0	1	1	3
公開デー等の開催件数	1	1	1	1	1	1	1	1
視察者・見学者の受入件数	36	45	61	33	26	37	38	25
視察者・見学者の延べ人数	650	668	855	512	371	603	648	359
学会等役員・委員等件数	7	6	11	12	14	17	9	12
国際協力事業等への協力件数	2	0	0	0	0	2	0	0
道関係部との連絡会議等の開催件数	7	29	21	25	37	28	20	6
市町村との意見交換等の開催件数	2	4	13	3	16	5	8	2
外部機関等との人材交流件数	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(大学等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(研究機関等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	1
国内研修Ⅱ(企業等)の派遣件数	0	0	0	0	0	0	0	0
国内研修Ⅱ(学会等)の派遣件数	3	6	7	6	6	3	4	8
国内研修Ⅱ(シンポジウム等)の派遣件数	4	0	0	0	0	0	1	0
企業等への訪問件数	31	44	35	20	18	22	18	29
関係団体等との意見交換等の開催件数	12	25	29	25	38	24	29	43

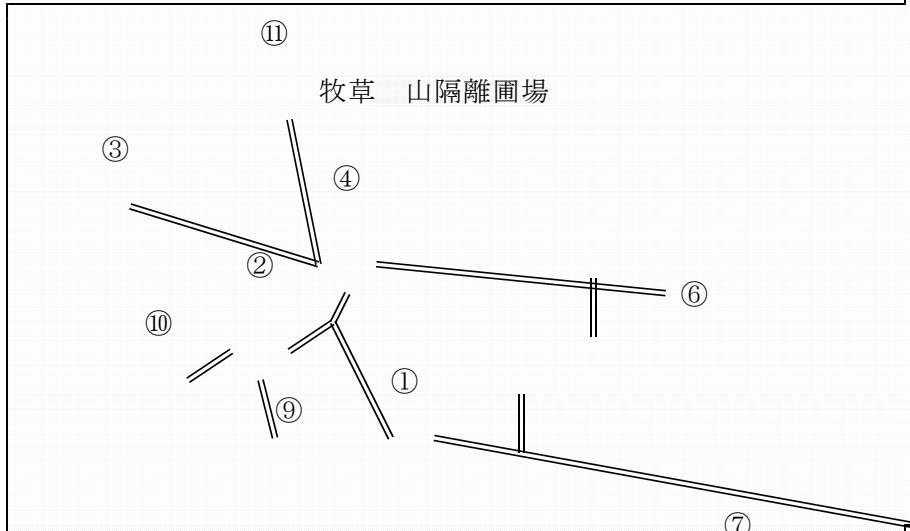
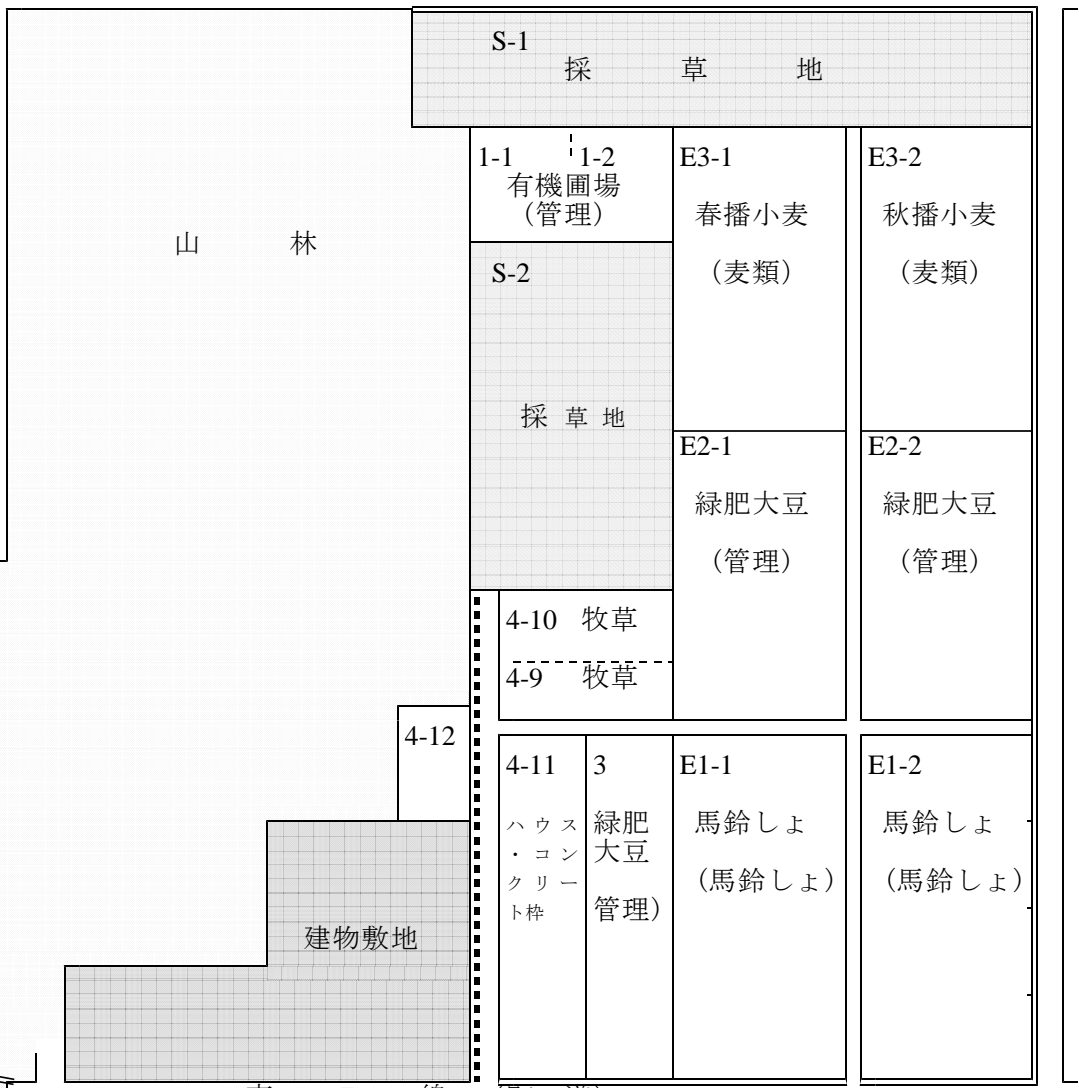
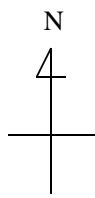
6 北見農業試験場建物配置図

土地の所在 常呂郡訓子府町字弥生52番地

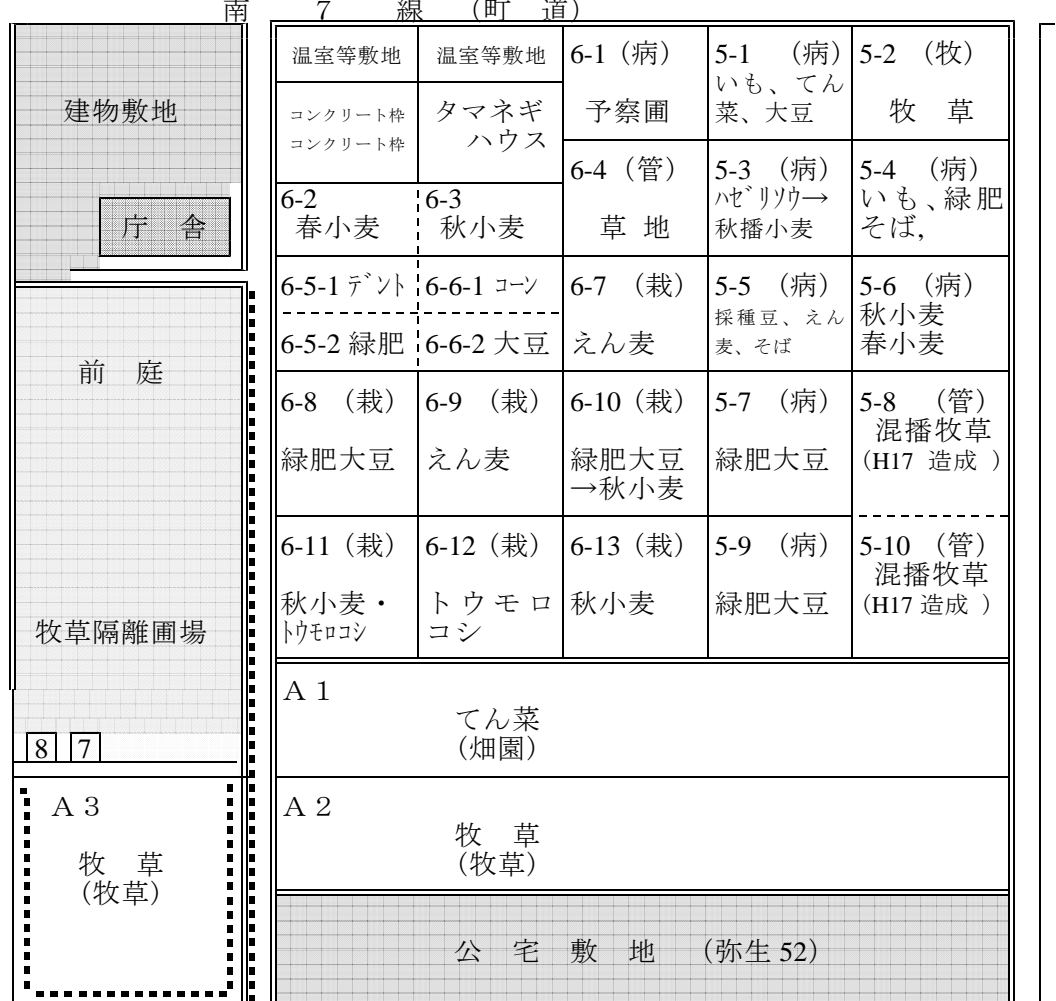
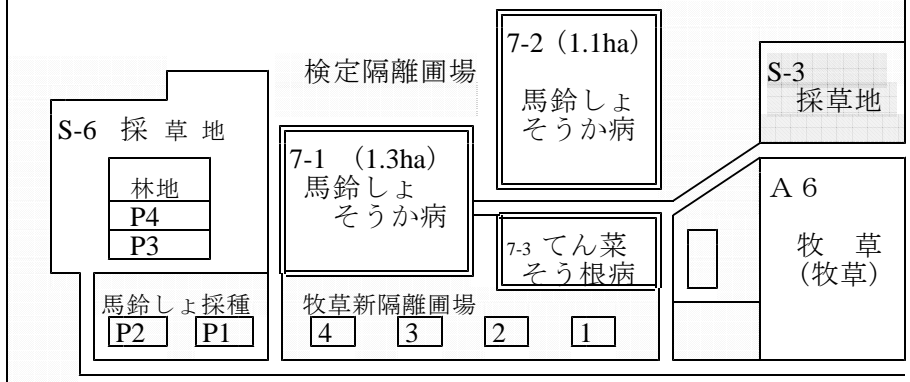


7 平成30年度圃場配置図

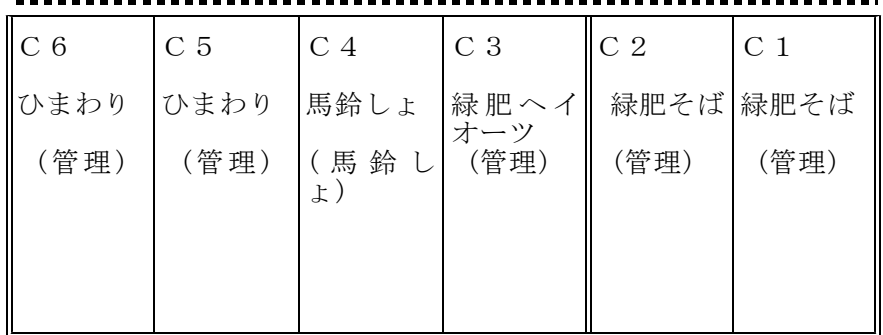
H30.6.6 作成
業務委員会事務局



*馬鈴しょ採種圃(P-1～4)の輪作順は
①ヘイオーツ → ②馬鈴しょ → ③普通えん麦 → ④緑肥大豆
そうか病、そう根病



至置戸 南 8 線 (道) 正門 至北見



至置戸 旧ふるさと銀河線 至北見

北海道立総合研究機構 北見農業試験場年報 平成30年度

令和元年6月発行

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 北見農業試験場

〒099-1496 北海道常呂郡訓子府町字弥生52番地

電話(代表) (0157) 47-2146

ファックス (0157) 47-2774

HPアドレス <http://www.hro.or.jp/list/agricultural/research/kitami/index.html>
